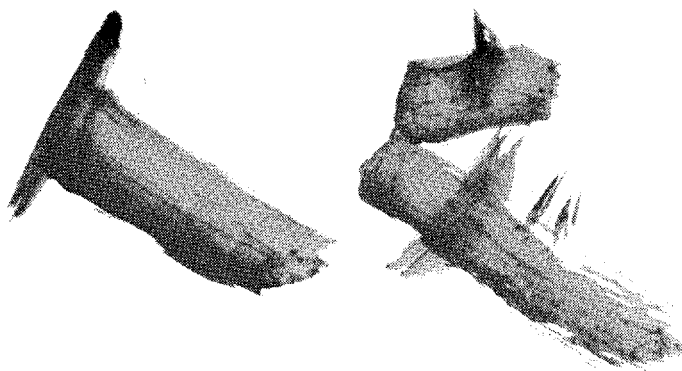




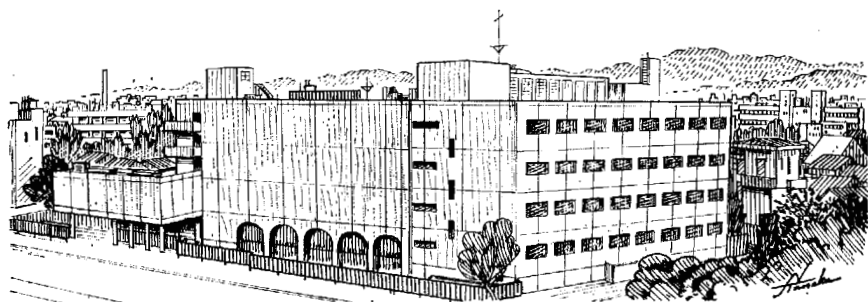
第一二号

新館落成記念



1975

京都大学人文科学研究所



人 文 第一二号 新館落成記念

1974年5月

も く じ

所長挨拶

新しい研究の出版……………林屋辰三郎…2

人文回顧

建物と研究活動の歴史……………座談会…4

*

人文研創立当時の人々……………柏 祐賢…17

旧分館とわたくし……………吉田 光邦…19

人文科学研究所東方部の漢籍と私……………吉川幸次郎…20

創立時代の建物……………長広 敏雄…21

『橋と塔』の建物……………森 鹿三…24

建物物語

旧分館設計者村野藤吾氏に聞く……………28

旧本館設計者東畑謙三氏に聞く……………33

*

人文の建物——自分の住み家を愛さない……………田中 淡…41

改築について……………河野 健二…27

人文科学研究所蔵の銘文のある青銅器……………林 巳奈夫…32

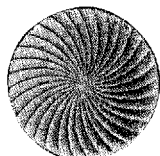
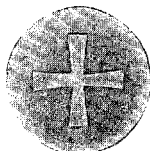
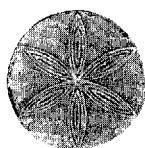
新しい研究の出発

林 屋 辰 三 郎

わたくしたちの宿願であった人文科学研究所の新館が竣工いたしました。ここに至るまでには、岡本道雄、前田敏男両先生二代にわたる総長をはじめ、学内各部局の皆さま、さらには本省の担当部課の方々、設計施工に当られた建築関係の多くの方々、そのほか内外の関係者の方々のご支援とご協力をいただきました。これからこの新館によって研究所として日常活動に従う者として、まずこの日のよろこびを肝に銘じて、深い感謝をささげるとともに、研究者としての決意を新たにしますであります。

さて研究所はこの新館によって、創立いらいはじめて日本・東方・西洋三部統合の所屋をもつことが出来ました。もともとそれぞれ創設の時期も動機も異なった三つの研究所が、京都大学附置の一研究所として再出発したのは、昭和二十四年一月のことです。もっともその中核となった旧人文科学研究所は、昭和十四年八月に設立され、最も古い歴史を有つ東方文化研究所は、昭和四年の設立でありますから、創立記念日としては歴史の古いものによって、本年を四十六年目に数えています。再出発より数えても四分の一世紀をこえて、はじめて一研究所として独自の所屋をもったということが出来ます。

このことは、人文科学研究所の研究活動の上でも、三部の思想・文化・社会など一般部門における研究に比較・綜合の視点を与えることにさらに大きく寄与するのではないかと存じます。新所屋には国際会議にも利用できる会議室や不十分ながら外国か



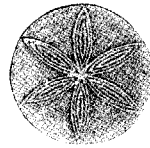
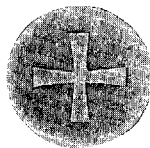
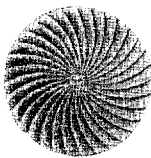
らの客員教授室も準備することになっております。研究所はこれまでもそうした視点の追求を怠っていたわけではありませんが、ややもすると各部に現われがちな専門分化による孤立・分散の傾向に、大きな反省を加える機会となりました。

また時を同じくして、特殊部門においても本年より「現代中国」の新部門の創設が認められ、別に「科学史」・「芸術史」については実験部門化が実現いたしました。このように研究をいっそう具体的に深めることも漸次可能になりましたが、さらに将来の「社会問題研究資料センター」の構想をも含めて、新館によって拡大した研究所の空間の充実を考えることもできるかと存じます。

それとともに旧本館についても一言せねばなりません。現実的には東方面の方々が研究上の必要性から少なからず残留されることは已むを得ませんが、今後は主として「附属東洋学文献センター」の所屋として使用されることはいうまでもありません。

その上、旧本館は、歴史的建造物として文化的価値が高く、将来、重要文化財指定の可能性も考えられますので、保存的利用を基本と致したいと思います。そのためには建築物・附属調度などの補修とともに、各部分の当初の機能を復元する努力も払わねばなりません。その点で今回建築空間の余裕を得て、階上閲覧室に講堂の機能を回復させることができますのは、有難く且つ意義あることと思っております。

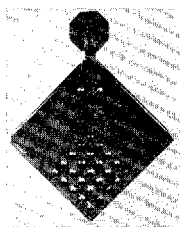
新所屋の竣工にともなって、いろいろと夢はふくらんで参ります。一言にして言えば、総合的研究の新しい出発であります。わたくしはこの竣工に際してたまたま所長の職に在ってこうした感想を述べましたが、この建設はわたくしの入所以前からの計画であり、河野健二前所長はじめ施設実行委員諸兄のご奮闘によるところで、関係者の方々のご尽力とともに、ここに心から謝意を表したく存じます。今日この冊子を手にするすべての皆さまに、御礼を申し上げます。



《座談会》

人文回顧

建物と研究活動の歴史



語り手

井上清

太田武男

河野健二

島田虔次

日比野丈夫

藤枝晃

聞き手

飯沼二郎

上山春平

梅原郁

▼本部構内の原人文

上山 このたび新館の落成を記念して、所報のほうで、新館落成記念特集を作ろうということになりました。そこで、人文の

建物、その中での研究生活、そういうもの一切を含めて、「人文回顧」といったテーマで、この座談会をもちたいと思うわけです。はじめは定年で既に研究所を去られた先生がたにも、加わっていただいてと思っ

たのですが、日程その他の都合で実現が難しいので、所内のいわば「古老」の方々、と申しては失礼かもしれませんが、分館三人、本館三人というような顔ぶれでやっていただくことになりました。本館と分館は成立の歴史も違いますし、これまで建物も別々でやってきたわけですが、今の本館は北白川の東方文化研究所の建物を引き継いで、そこを東洋部が使い、今の分館は東一条のもとのドイツ文化研究所の建物を日本部と西洋部が使ってまいりました。従来は東方文化研究所以来の建物に事務室がありそこを本館と呼んでいたのが、これまで分館があった東一条の敷地に新館ができ、そこに事務室が移ることになりました。そうなりますと、そこが新たに本館と呼ばれるようになるのかと思いますが、これは、わが人文科学研究所の歴史にとっては、一つの大きな転換点ではないかと思われま

そういうわけで人文が昭和二十四年に統合してから今日までの歩みについて、いろいろとお話をうかがいたいと思うのです。わが人文科学研究所も、数年後には創立五十周年を迎えるわけですが、第一世代の方々

は皆さんかなり以前にここをお去りになって七十代におなりですね。そして、その次の第二世代の方々もしばらくするとみんなおられなくなるので、この機会にお話をうかがってみたいと思うのです。

河野 人文科学研究所の創立の歴史は、昭和十四年にさかのぼり、本部構内の附属図書館の前にあった木造の二階建ての建物からはじまったのです。

藤枝 あの建物は、文学部の研究室を解体して持ってきたんですよ。

河野 そうでした。わりに造りのしっかりした風格のある建物だったんじゃないですか。

藤枝 そのころ文学部の事務室におられた吉田良馬氏が、あれをこわす時に、慣れた建物をこわして、と言って勿体ながった。それが人文の建物に転用されて、そこに吉田氏が事務長になって来たという因縁がありますよ。

河野 あそこはもうなくなってしまっただけです。今は教育学部の建物が建ってるわけですね。

上山 河野さんはあそこからおられたのですか。

河野 ええ、戦後、人文に招かれてそこに入ったんです。

藤枝 統合の直後に西洋部のやったルソ―研究なんか、あそこでやってたんでしたね。

河野 ええそうです。

藤枝 統合以前には、安部健夫さんが元典章の講読などをやっていた。

上山 そこには中国関係をやる人と、他にいろいろいたんですね。

日比野 やはり中国研究が中心ですよ。

太田 そのころ、『東亜人文報』とかなにかいうのが五、六冊でした。

上山 河野さんがおっしゃったように、

そもそも人文科学研究所というのが生じた場所は、今おっしゃった本部構内の西門の近くにあった、今はない木造の建物なんですね。しかしその時には、東方文化研究所は、京大の施設としてではないけれどもすでにあったわけです。それが戦後に、本部構内のみすばらしい人文科学研究所と統合されて、人文研の拡大再編成が行なわれたわけです。そして、その後は、もとのドイツ文化研究所に移った分館と、旧東方文

化研究所を拠点とした本館と、この二つを軸として運営されてきました。そこで、これからの話はこの二つを中心に進めたいと思います。まず、藤枝さんから、東方文化研究所の生い立ちあたりから……。

▼東方文化研究所草創のころ

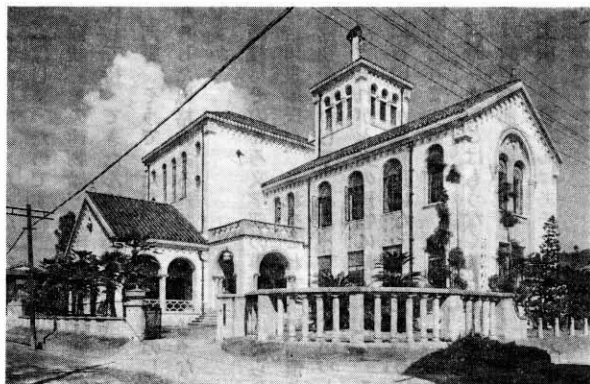
藤枝 この建物ができたのは昭和五年の十一月ですが、僕が昭和六年に文学部の史学科に入ったころには、陳列館に、東方文化学院京都研究所嘱託という方が沢山おられて「史記」の索引とか、「遼史」「金史」の索引とかやっておられました。貝塚茂樹さんなんかも僕が学生の時は陳列館で仕事をしておられたですね。

日比野 「史記」が貝塚さんで、「漢書」が曾我部さん、「後漢書」が藤田至善さん……。

藤枝 「遼史」が若城久治郎さん、「金史」が小野川さん、「元史」が鷲淵一さん。そして時々狩野直喜先生が見回りに来はって。

日比野 それ以外に、十三經の注疏の索引をつくる仕事もあったんですよ。

飯沼 じゃ、建物ができる前に、研究所は発足していたというわけですか。



館 本 旧 の 川 白 北

日比野　　そうです。研究所は昭和四年に
発足してゐるんですよ。

藤枝　建物が出来たばかりのころは、こ
のへんはみな田んぼや花畑で店なんかなく
てね、昼飯の出前するところがないんですな。
中国人のコックを雇って昼は中華料理。今
の事務室が食堂ですよ。

上山　ところで、東方文化研究所のデザ
インですが、研究の内容と建物のデザイン
との関係は何かはっきりしたものがあった
んですか。

藤枝　一番はじめは浜田耕作先生だった。
ハワイの美術館がこのスタイルだそうで
すよ。東方風、つまり西洋でいうオリエン
ト風、僧院風の建物ね。そしてその原型を
浜田先生がこういう形でやりたいと東畑謙
三先生に言ったんだね。その時のことで東
畑先生が言っていたのはね、浜田先生の研究
室に行くとき先生が机の上に硯箱を出して画
仙紙に墨でこういう具合にしようとするん
だとスケッチを書いてね。こういう風なの
にしたいと言わねるのやと、それが近代建
築をやって烏口で線を引く人の目からみる
と奇異にみえたさうだね。でもまあそうい
うことによって研究室を建てたさうですよ。
その時分、東畑さんの話によると研究所と
いうものは日本にそもそもなかったとい
うことだね、研究室の個室をどの位の大き
さにしたらよいかってことがわからなくてね。
研究室はこの位の大きさにしてよろしいか
と先生に言っても、先生の方が頭はないも

んだから決まらなくてね、そこで一部屋の
間口を何米、奥行を何米にしてよろしいか
と言うと、先生はメートルで言われてもピ
ンと来やへんで「うん、それでよからう。」
ということで決まっちゃったんだと、東
畑さん言っちゃったんですよ。

上山　今、歴史の研究室とか、考古学の
研究室とか六つほどの大部屋がありますが、
それは最初に東方文化研究所ができた時か
らあったんですか。

日比野　そうです。これはね、東京に東
方文化学院という本部があって、その下に
東京研究所と京都研究所があったわけだ
すね。そして東京は本部ですけども、建物
は京都の方が一年早くできたんです。各々
に評議員会があって、京都の方は狩野先生
を先頭に、その時分の偉い先生方がずらり
と顔を列べておられました。小川琢治先生、
桑原隲蔵先生、内藤湖南先生、高瀬武次郎先
生、松本文三郎先生ね、それから新城新蔵
先生、そういう文学部以外に理学部もふく
めて、大先生が評議員になる。現職で評議
員だったのは、羽田亨先生と浜田耕作先生
のちには小島祐馬先生、どなたもみな若か

ったわけですね。その指導のもとに実際に研究するのは、今では殆んど定年になられたが、当時、大学を卒業したての安部、長広、森といった方々でした。さきほど話の出した歴史研究室とか考古学研究室といった大部屋は、それらの大先生の勢力によってだいたいできたんですよ(笑)。これはまあ羽田先生は歴史、小川先生は地理、松本先生は宗教という風にね。それに狩野先生は経学・文学ですから、そこに倉石先生や吉川先生が属する。そして新城先生は天文学と数学ということで科学史研究室ができる。そんな風にして……。

上山 どなたかが一挙に考えだしたというより、いろんな既存勢力の陣とりみたいなものだったわけですか。

日比野 僕はそういう気がしますよ。東京では研究員はもう名誉教授になられた先生方とかあるいは安井小太郎先生のような老先生でしてね。そして今日七十位になられた人々はその時分はみんな助手だったんです。京都のはそうじゃなくて若い卒業したての人が研究員になり、助手というのは少なかつたんですよ。私の今の地理の部屋

へは小川先生が毎日来てられたようですね。定年になって行くところがないもんだから毎日楽しんで来てられたのだと思いますよ。上山 日比野さんはこの建物ができてから入られたんですね。はじめはどういう資格で入られたんですか。

日比野 私は昭和十一年卒業ですが、数年たってからですよ。嘱託という名目です。その時分はここは気持がひきしまるというか怖ろしいところだね。表の玄関からは誰も入られやしません。そこの横手の入口からだけですよ。そこで下駄をぬいでぞうりにはきかえてね。所長先生だって同じです。表から入るなんてのは、外国から来たようなよほど偉い先生だけでしたよ(笑)。表の門を入ったところの敷石のすきまがあいたと

こに小使さんが松葉牡丹の種を蒔きましてね。それが夏になるとずっと咲きまして、内から入ってくる二尺程の道だけが人の通れるところでしたよ。そのころまだ梅原さんのお父さんの部屋もありましたし、倉石武四郎先生もまだこの所員でした。

上山 倉石先生は哲文ですか。

藤枝 梅原先生、倉石先生は文学部と兼

任でしたね。吉川幸次郎さんより若い人が専任です。もう一人専任で年とった方で……日比野 音韻学の高畑彦次郎先生がおられたのです。あの方は羽田先生などと中学が同窓でしてね、随分長いことおられたですが。

▼東方部の住みごこち

上山 この研究所は人文科学系の研究所としては、日本でもおそらく最も早い例に属し、また京大の十三研究所の中でも化学研究所に次いで二番目くらいにできています。ですからその施設を使った体験というものは、大へん貴重だと思えます。その点について何か……。

藤枝 僕は図書係で入ったから、この仕事は二、三人おらんとできんわけですが、この個室は二人は入りにくいわけですね。東畑さんの話によると、一人でメディテートするところだというつもりで設計しているとのことだね。

上山 修道院みたいだね。

藤枝 ところが研究所となるとやっぱり二人か三人で共同研究することを考えんかね。そりゃ今の哲文研究室のような中型の

部屋もありますがね、ひとつひとつの部屋がやはりもうちょっとスペースある方がいい。一人のメデイテーションより……。家内工業的にね。

日比野 でも僕はそんなことあまり考えなかったですよ。大きい部屋もあいておったし。

藤枝 そりゃあなたの隣りに作業室（地理研究室）があいてたから。僕ら個室は階下で、図書室は二階でしょう。

日比野 それはまあ、二人入るなんてことは、はじめから全然頭になかったんでしょね。

藤枝 東京の研究所は、はじめからひとつの部屋に二人入るということで設計してあったんですね。

日比野 東京では文学部がそうですわ。狩野先生はね、一人部屋をつくって下されたのです。その代り洗面所のところで小便したらいかん、それから女の人を部屋に入れるなと、そのふたつが条件だったと聞いています（笑）。

飯沼 鍵のことですが、どなたの鍵もそれぞれ違うわけなんですが、その各々で玄

関と図書室つまり入口と書庫だけは開く仕掛になってるのだそうですね。ですからどんなに遅くまでやっていても、宿直に迷惑をかけない。これは大変いいアイデアですね。どなたの考えなんでしょう。

藤枝 狩野直喜先生ですよ。

日比野 あれはアメリカのカービンという鍵を作るところに注文したんですわ。

藤枝 注文したといっても偶然にそのセツトがひとつ売物としてあったんだそうですね。

日比野 そうでしたか。それで安かったんだな。あんなもんをいっち注文して作らせたら大変ですな。それでむこうにはちゃんと鍵の番号がひかえてあって、どれかがなくなっても、番号さえいえば何十年後でもちゃんとまた作ってくれるというしかけになっているんですね。

上山 島田さんはメデイーション型の方だと思っけれども（笑）、この建物を使ってこられた側として、何か御感想はありますか。

島田 まあ僕は昭和十八年に入って二十一年まで、この間は助手でしたから今の哲

文の大きな合部屋でした。それから二十四年の暮にあらためて人文に来て、それから今日まで三つ部屋を渡りましたかな。それぞれの個室はもう完全防音の厚い壁ですし、それにこれは用務員の山田さんに感謝せんならんけども、いつまでおっても勉強してる限りは文句いわれなかったし、そんなことで一時は本当に徹頭徹尾この施設を利用させてもらって勉強しましたね。

上山 島田さんも大分遅くまでやった時代があるんですね。

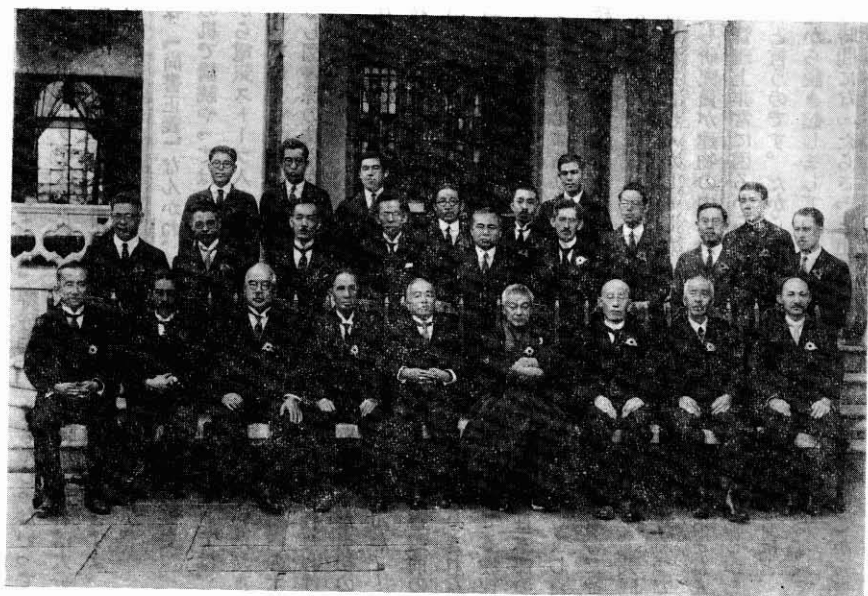
島田 それそうですね。下宿がすぐそこでしたしね。

藤枝 それで休こわしたんですな。

島田 そりゃ時には四時ごろまででもね。ことに夏はいいんですわ。フラリフラリ帰るのが。そしてちに熊野神社の近くのアパートに移ったでしょ。ちやうど良い距離でね、明けがた帰るのには、いっぺん何かの非常警戒にひっかかりましたがね（笑）。

上山 そのところは遅くまでやっておられる方はわりと多かったんですね。

日比野 どうかには夜通し灯がついてましたな。



昭和5年11月9日落成式当日，評議員，所員，事務職員の記念写真

（前列左より）新村出，浜田耕作，新城新蔵，高瀬武次郎，狩野直喜，内藤虎次郎，小川琢治，松本文三郎，鈴木虎雄 （中列）能田忠亮，松浦嘉三郎，羽田亨，梅原末治，伊豆野直，小島祐馬，塚本善隆，石橋五郎，安部健夫，森鹿三，木方真，長広敏雄 （後列）青山清，箕田弁三，上島竹二郎，羽館易

上山 最近はいぶ減ったんですか。

藤枝 前より少いですがね。それでもやっぱりどこかに電灯がついてますよ。

飯沼 それは、みんなお家がこの近くだったということもあるんでしょうね。

島田 そうですよ。それでそんなことができたんですよ。今みたいに家が遠かったらそんなことできませんよ。

日比野 それからこの書庫ですがね、これが非常に小さい。これは狩野先生の好みもあったようで、書庫と書齋とを兼ねたところが特徴です。その中に机を置けるように、書架と書架の間をうんと広くとってね、その間で勉強する。そして時には研究会なんかもその中ですといった理想的な形ですが、そんなものは当時としては誰も考えつかなかったわけですね。だから狩野先生はこれくらいの規模でええといわれる。すると小川琢治先生がね、そんな無計画なことではいかん、しばらくたったら書物が一杯になって困ることになるといって大いに激論されたそうです。でもあの時分は図書というものは毎年どれだけ増えるとか、何年たったら一杯になるとか、そんなこと

は誰も考えなかったのでしょうか。狩野先生はまた小川がホラを吹くといって一蹴され、それでこういう小さい書庫になったのだということです。

藤枝 「尚書正義」なんかね、書庫のまん中の机で講読やってはったですよ。冬は寒いから電気ストーブ入れて。でも空気は上に乗っていくし、床も柱も鉄でね、冬は冷えるし図書係の時はかなわなかったですわ。

日比野 図書係は中二階におりましたね。
藤枝 ええそうです。

上山 ところで、戦後に、ここが京大の人文科学研究所に統合されて、その中の東学部ということになったわけですが、何か目立つような変化はありませんか。

藤枝 大学の建物管理規則というのがこちらに持ち込んでこられますし、そのことで一度事務室とけんかしましたよ。五時をすぎても研究員が建物の中に沢山残っているのは管理上非常に困るからやめていたのだきたいと言うのです。だから僕が研究所創立の話から説き起しましてね、研究所というのは時間になったらさっと出て行くように

なもんじゃないってことを言ったんですよ。
河野 あれは大分議論になりましたね。僕も覚えてますよ。昭和二十五、六年位じゃないですか。

▼分館の歴史

上山 それでは、このへんで、分館の話に移らせていただきます。太田さん、河野さんは本部構内の木造の建物にいた時からずっとおられたわけですが、今の東一条の分館に移った当初のことあたりからお話しねがえませんか。

河野 図書館前の木造の建物は非常にせまくて、入りきれなくてね。つまり今、学生部が使ってる赤煉瓦の建物の二階に、太田さんたち日本部の方が入られた南分室というのもありました。桑原武夫先生や私など西洋部のものだけが、図書館前の建物に入ったのです。共同研究する部屋もなくて非常にきゅうくつでしたね。だから北口川の本館に来るとなんだか植民地から本国にきたような感じがしていましたね。

上山 なるほど、そのひがみが長いことあったわけだな（笑）。

河野 そこから東一条に移ったのが昭和

二十七年でした。

上山 あれはどういういきさつだったのですか。

藤枝 それまではアメリカの進駐軍があとを接収してたんですよ。

河野 戦争中にはドイツ文化研究所といってたんですよ。

藤枝 それが戦後に財団法人「西洋文化研究所」に切換えられた。しかし建物はアメリカに接収されていたので、ここに終戦事務局が払う家賃が入り、それを人文に図書費として使わしてくれていた。だから西洋部は潤沢な図書費をもっておったわけです。

河野 移転のいきさつを申ししますと、今お話の西洋文化研究所は、占領軍の接収がつづいて仕事ができないので、解散をして建物及び財産を京都大学に寄付することになり、京大に寄付するについては人文がそれを使うことを認めるということになったのです。解散の決議があったのは昭和二十一年ですが、実際に使えるようになったのは昭和二十七年でした。関係者の努力は大変なものようでした。



東 一 条 の 旧 分 館

太田 今、河野さんがおっしゃったように表向きは京大に寄付するということになってたわけです。それで我々内部では、それを人文のことと思うてるんだけど、もう思っていない人もあるわけです。現に流川

総長と何かの席で雑談していたとき、私に「あれは京大に寄付するとは書いてあっても人文にとは書いてないんだよ」と言われましてね（笑）。

河野 七月一日付で京大に寄付になったので、四日からね、日本部と西洋部から各二名の教官が暫らく新しい建物に宿直した。一泊宿直料二百五十円という記録が残っています。

太田 そのころ本部ではね、時計台をつぶして、本部講内の西南の外人官舎のところに本部を移して、そのむかいの人文のことを迎賓館にしようという計画があったようです。

上山 じゃ、人文の権利は結局どこで確認されたんですか。

河野 それは西洋文化研究所の理事会で決まったんです。

太田 しかし京大とは書いてあっても人文とは書いてない。それをこっちが都合良く読まんから、じゃまが入らんうちにと……。

河野 理事長は鳥養利三郎先生で、理事は羽田亨先生とか新村出先生といった方は

ちでした。

日比野 同情者が多かったから良かったんですね。

河野 旧館はアメリカのCIAが使っていたということで、うす暗い部屋があったり、外には鉄条網があったり、戸棚のガラスに椰子の浜をペンキで描いてあった。**井上** 女の裸体の絵がいっぱい描いてあったり。二階の会議室になんか……。

藤枝 それからベットでタバコを吸うべからずなんて貼り紙がしてあったりした。

上山 移り住んでからの使い勝手はどうでしたか。

太田 そりゃ進駐軍が返してくれたら僕らのとこにくると聞いてましたから、赤練瓦におる時から憧れてましたし、実際にはいつてみてもまあ非常に良かったです。北白川ほどではないにしても、赤練瓦におった時は、部屋の空間は勿体ないぐらい広いし、南向きで日当りもよかった。しかし、机といっても個人の勉強の机と脇机だけ。それと書棚一本だけだね、あとはなにもない。

人文科学研究所が東方文化研究所と合併

をきめた一番最初の所員会は昭和二十三年の九月の三十日であったと思っています。それは文学部の会議室でやりました。そのあとは本部構内の分館の方で。

河野 図書室がなくて文学部の部屋を借りて図書を預ってもらっていました。だから図書は遠いところあるし、人を集めるのも面倒だし、不便なことでした。

上山 そうすると今の東一条の分館に入ったということは一大飛躍だったわけですね。

河野 ええそうです。大いに喜びました。
上山 そういう草創期の御苦労が一段落したころ、昭和二十九年に、ここにおられる井上清さん、飯沼二郎さん、それに私の三人が一緒に入った。

飯沼 井上さんが一月、僕が二月、上山さんが三月（笑）。

上山 井上さんは最初の宮仕えというわけですが、印象はいかがでしたか。

井上 いや僕はびっくりしたな。第一外側は鉄条網だし、階段があっちこっちにあるってどれがどこに抜けるやらわからない。それに部屋の間取りもなんといいていいか

わからぬような……。それでそこが元ドイッ云々ということを書いてね。こりゃなんだかゲシュタポの取調所じゃないかと思うような感じでしたよ（笑）。一番最初の僕の部屋は二階のまん中のとこで、六畳一間位なんだけれどそれも出入口が三つ位あって、どれがどこに抜けるやら、迷路のよう

で気味の悪いところだと思いましたね。でも、いいなと思ったのは控室。新聞やなんかがあって談話室みたいでね。だから僕は上の自分の部屋はそんなことで感じが悪いもんだから、いつも談話室で新聞読んで茶を飲んで、来る人をつかまえては喋る。それがまあ僕の最初の勉強でしたな（笑）。

日比野 談話室というところ……。
上山 裏門を入ってつきあたりのとこ。
井上 ああいう気楽にやれることはやっぱり研究所にはなくてはいかんですな。

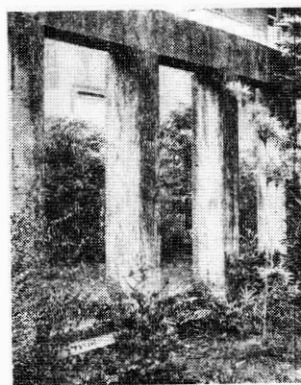
飯沼 黒板があつてね。議論すると、それ使ったりして、いつでもあそこでやりましたな。
上山 そう、よくみんなでやりましたね。僕が初めて明治維新のことについて考えはじめたころ、井上さんに話をきいてもらっ

たら、なんだ、君はイロハを知らんな、と言って色々教えてくれた。

飯沼 何時間でもやりましたな。

井上 当時は正規の日本部の研究班というのはひとつしかなかった。坂田さんが明治時代のことをなにかやればなにかがでてくるだろうということから、明治初年のものをなにかやろうと。坂田方式というのか、広く囲いをこしらえてその中で自由にやらせるということだったですからね。

河野 あれは一部一班制ということだね、桑原さんが非常に熱心で西洋部はひとつだというようなこと言われたんだが、だんだん清水盛光先生とか、今西錦司先生もそうですが、別に班をつくるようになって、一



旧分館玄関脇の列柱

部一班制が維持できないようになった。

上山 あれは、たしか私が来て三年目くらいだから、昭和三十二年ころでしょうか。河野さんが桑原さんに意見書を書いて、今や一部一班制は維持できぬ、いくつかの班に分けた方が現実的ではないか、というような提案をされて、既存の清水さんの共同体班のほかに今西さんの人類班がスタートしたように思います。

▼東方部の研究体制とその前史

上山 いま、共同研究の話がでしたが東方部の共同研究は大分スタイルが違うのではないですか。宗教研究室とか哲文とか研究室のある数位のチームがあったんじゃないですか。

藤枝 旧東方の時には大体あの研究室が中心で共同研究ができてたわけですね。それが新人文になってからも、かなり尾を引いてますね。つまり中型研究室を基盤にした共同研究ね。

上山 その共同研究は、内容の上でも分館とはだいぶスタイルの違ったものだったのでしょうか。

飯沼 分館の共同研究は、いろんな専門

の違った人を集めようという風でしたが、東方部の方はそういう風じゃなくて、同じ専門の方が集って共同研究あるいは同じ本を読むという特徴が強いんじゃないですか。

島田 それはまあそうともいえませんでしたね。しかし同じ研究といっても、よそから見たら一色に見えるかもしれないけども（笑）、みんな漢文読むからね。しかし必ずしもそうでなくて、漢文読みの中にも哲学、文学、史学とありましてね、ちょうど横文字読みの間にもあるように。だからそれらが集まったからといってよそから見られる程、一色ではなかったんですよ。

藤枝 分館の共同研究の方もこちらから見れば同じ専門の人が集ってるように見えるんですよ。

上山 なるほど。

梅原 東方文化では、最初若い人に必ずペアで指導員をつけた。つまり将来性ある若い人たちのためにこわい先生がいつも目を光らせていたときいています。

日比野 ペアというのはえらい失礼ですね（笑）。

梅原 指導をされる研究員はそのフィー

ルドにおいては、初めから絶対の専門家になるような養成をされたんじゃないですか。

日比野 ただまあひとつの研究題目があって、それについて今言われたようなことがありましたけれども、それだけで別にどうするということではなかったんですよ。結果として今言われたようになったかもしれませんけど。

梅原 指導を受け訓練された人たちが、のちに東方部の共同研究の核になっていったように思われますが。

藤枝 いやそれは違いますよ。それはひとつの表向きの組織にすぎなくて……。

日比野 こちらでは共同研究なるものが正式にこの研究題目として認められていたのは『尚書正義』しかなかったんですよ。

上山 いつごろまでのことですか。

日比野 ええまあ終戦後まではね。でもそういうのは北中国の石窟研究というのは水野清一、長広敏雄お二人の共同研究になってました。そして初めは浜田先生が指導員でね。そこに塚本善隆先生なんか仏教史の方から協力されるのはまあ自由参加みたいな形でした。それで正式の共同研究組織

としては特に認められてなかったです。

藤枝 それに形がついたのが「東方学報」の房山専号。

日比野 あれはみんなで旅行したからですね。

島田 他のところはどうか知りませんが僕はあのころ経学文学研究室（哲学文学研究室の前身）といったたこの助手をしてましたがね。指導員というのはおそらく当時は小島祐馬先生と鈴木虎雄先生、それから狩野直喜先生と、これらの方々がなさっていたんだと思いますよ。しょっちゅう来て指導されるということは勿論なかったですよ。ただ研究報告を先生に提出してね。僕は直接返ってきたものを見なかったから余り知らんけども、その先生がこのところは直せとかいって、返ってくるんですね。なぜそのこと覚えてるかというとな、某先生のとこへ出した報告がいつまでたっても返ってこんどいて、吉川先生が怒ってはいったことがあるんですね。

日比野 それは嚴重なものでしたね。

上山 年に一回ですか。

日比野 いやいや、大体三年を期限とし

てね、延長もありました。そしてその研究報告ができれば出版するんです。応接の戸棚に並んでいるものですね。

▼共同研究のあゆみ

飯沼 共同研究というと、人文には部が三つあるわけでしょう。先程もお話がありました。私がきた当時は一部一班ということで、部を超えた研究会というのはなかったと思うですね。それがまず日本部が二班に分かれ、西洋部が二班もしくは三班に分かれるといった形になってくるのが三十二、三年ごろ。それから分館の方で日本部と西洋部が一緒になるような研究会ができてきた最初が、おそらく清水先生の村落共同体の比較研究だと思うんですね。それがさらに発展して、ブルジョワ革命の研究会、あそこで初めて日本部と西洋部だけでなく東方部も含めた三部が一緒になっての研究会というのが実現したと思うんです。それから後では、あれだけ大きな研究会はありませんね（笑）。

上山 あれは、飯沼さんが事務局で全責任を背負ってくれましたが、大変でしたね。

飯沼 河野さんがやることになってたのが、突然、研究会が始まる直前に教養部の方へ転出されることになったもんだから、僕は傍聴しようと思ったのに、こっちの肩にかかってくるようになりました。でもあれは楽しかったですね。だけど、五十人の研究会ってのは余りやるもんじゃないと今は反省してますけど。ただあれがきっかけで三部が集ってやるという研究会が、ずっと今もつづいているということじゃないでしょうか。

島田 僕は最近ちょっと遺憾だと思っているは、いつまでのことだったか、ここで出した研究報告はね、互選された審査員というのがそれを読んで、この報告にはこれこれの欠点もあるが、これこれのメリットもある。だから研究報告として認めるということとを所員会で報告しとったんですね。僕もそれを起草したことありますがね。このやり方はやっぱりなんらかの形でつづけてゆくのがいいと思う。

河野 個人研究についてですね。

上山 このごろそんなこと言わなくなっ



旧分館の夜景

河野 共同研究に力が入りすぎた(笑)。
太田 いつのまにか個人研究に研究期間
がなくなっていました。

藤枝 話は変わるけど、研究に指導員が
ついたといったさっきの梅原君の話、

僕の記憶では旧東方文化学院研究所を、東方文化研究所に改組した時にね、指導員という制度はなくなっただけなんです。で、その指導員の先生は評議員、いや商議員か……。

日比野 いや、初めは評議員でした。それがなぜ商議員になったかというね、そのころ既に京大へ吸収してもらった話ででたんです。それで京大の評議員と区別するために。

藤枝 その時に指導員という制度がなくなって、商議員の合同指導という形になり、出された研究報告を商議員の誰かが審査するという……。

日比野 そうでしたかな……。

上山 島田さんが今言われたような審査というのはその延長だな。

藤枝 そうですよ。当番の先生が読んで。

上山 そろそろしめくくるべきころあいになってきたようですが、河野さん、共同研究ということで、ずっと桑原先生のチームの事務局をやってこられて、今の時点から考えてみていろいろと御感想もあるかと思っんですかどうか。

河野 そうですね、ずっとやってきて私にとって非常に良かったのは、研究の楽しさというものを教えてもらったということ、これは一貫して感じたことですね。それに加えて、ルソー研究の時は『社会契約論』の翻訳を作ったということで、別に時間をとって二つの班を作りましてね、それで岩波文庫の翻訳をこしらえました。あれで非常に力がついたという感じがしますね。

ただ共同研究を維持していくためには、どうしても事務局が相当精力的にやってもらわないとうまく進行しないですね。私は余りやらなかったですが、事務局の仕事にあたる人は苦労が多いですね。

飯沼 今の河野さんの言われる、共同研究を支えるものが事務局だということは、そのとおりだと思うんですね。河野さんは謙遜なさったけど、長いこと事務局の仕事を担当してこられて、ずいぶん大変だったと思うんです。でも、そのほかに共同研究を支えるものがもう一つあると思うんですが、それが所員会じゃないでしょうかね。僕は人文に来て、大変、風通しの良いところではないなと思ったのは、所員会ですね。

学部教授会と違って、講師以上全員がそこで無記名投票でもっていかなるものをも決定する。その場合、すべての票は同等の一票で、助手代表も三人参加できる。なんでもそこでフランクに話し合えるという、こういうものがあるからこそ、研究会というものが活気のあるものになるんだと思いました。

だから、学部の研究会ですと、もちろん学部にもよるでしょうが、たとえば教授の意見に対して助手の人は、なかなか反対できないとか、そういうなかヒエラルキーみたいなものが、研究会の中にまで持ち込まれている。ところが、人文ではね、講師とか、大学でたての助手くらいの人が、相当お年をめた教授の説を、共同研究の席で堂々と反駁しても、しかも後になにもしこりが残らない。

それにもう一つ、僕が人文に来たばかりのときに感激したのはね、桑原先生の名前は前から知っていて、偉い先生だと思ってたんですよ。ところが研究会に出たら、その桑原先生が、まだ大学でたて位の若い人達にお茶をついでるわけね（笑）。僕はこ

れだから共同研究ができるんだろうと、そのとき思いましたね。

そして所員会は、六九年をきっかけに、もう一つ変りました。今度は、助手会というものを公式に認めてね。

上山 前からありましたよ。

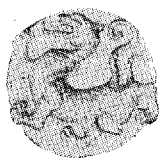
飯沼 あるにはありましたが、六九年からは、所員会における議題はすべて助手代表が助手会に持ち帰って、そこで、もし、反対がなければ、その次の所員会で決定するということを始めた。そのことを討議したときに、僕がとくに覚えてるのは、ある年とった先生が、所員会で提出された議題に対して、なんでもかでも助手会が拒否権を発動できるということになると、所員会の機能が麻痺してしまうだろう、だから、それに一定の枠をはめようと言われたわけです。そして、その時、多田君が、ふだんは余り所員会で発言されないんだけど、こう言われた。助手会が問題にするようなものは必ず重要な問題であるはずだから、それは当然みんなで充分に話し合った上で決めるべきものであり、助手会だって理性があるんだから、それを拒否権が発動でき

るのはここまでだと、制限するのはやめるべきだ、無制限にしようじゃないかと。その発言でそう決ったわけですよ。その時はどうかと思つた人もあつたかもしれないけれども、やっぱりみんな常識があるしね。枠をはめてなくても所員会の運営は円滑におこなわれてきたと思うんですよ。ともかくこのような所員会というものがあつて、共同研究というものが支えられているんじゃないでしょうかね。

上山 ではこのへんで。

(一九七五年二月十三日)

北白川本館応接室にて



人文回顧



人文研創立当時の人々

柏 祐 賢

人文研（編者註、統合以前の人文研）創立当時のことと言
うと、語るべきことがあまりにも多い。創立当時の専任
所員で、いまに生きているのが、わたしだけである。み
な若死にであった。もっとも創立後、すでに三十五年経
っているのであるから、亡くなるものがあったもおかし
くはないだろうし、かく言うわたしとて、もはや若くは
ない。歴史は一まわりも二まわりもしてしまっている。
ともかく当時を語り合える友はもはやない。

創立と同時に専任所員として発令されたのは（十月）、
大上末広、清水金二郎、柏祐賢の三人、それから半年経
って翌年四月発令されたのが安部健夫、高坂正顕であつ
た。もっともこの外には専任の助手、嘱託が何人もあつ

たし、また各学部の立派な教授方が兼任の所員というこ
とで、研究に従事して下さっていた（その人たちについ
ては、いまは語らぬ）。

大上さんは、満鉄から赴任してきた人であるが、剛腹
な男で、しかも頭の切れる学徒であった。専門は農業経
済。わたしとかなり近いことをやっていたということも
あって、はじめから深い接触をもった。しかし不幸にも
戦時中、とらえられ、満州にうつされ、取調べ中に発疹
チブスで亡くなった。まことに気の毒なことであった。

清水さんは、関西学院大学から赴任してこられた方で、
専門が民法。実に実直な方であった。こつこつと蓄積し
ていくやり方には、頭が下がった。沢山の訳書も出され
た。わたしの専門からは遠かったが、しかし歴史的社會
経済学的な傾向をもっていたわたしにとっては、まことに
良き師であった。ところが戦後、九州大学にうつられ
労働法研究所長などをとめていられたが、病を得て亡
くなられた。おいしい人であった。

安部さんは、三高の教授からうつって来られた人であ
る。専門は東洋史、わたしとはまるでちがっていたのだ
が、しかし同室であった。中国経済をやらざるを得なく
なっていたわたしにとっては、安部さんとの同室は、意
義のあることであった。いや、それを考えての研究室割
当てであつたかも知れぬ。安部さんは学問に対しては、

大へん厳しい人であった。わたしは『経済秩序個性論』を書いたときなど、安部さんから大きなヒントを与えられたのである。わたしには大恩人である。和服姿で、小さなキセルでゆっくり煙を立てながら、じっと考えていた安部さんの姿がいまも眼にちらつく。その安部さんが昭和三十三年の年の暮れ、ドイツ留学に出発するわたしを、京都駅頭まで見送って下さった。「元気でいってこいよ」と握手。いまでもその手のぬくもりが伝わってくるような気がする。しかしこれが安部さんとの永遠のお別れであった。ドイツで安部さんの訃報を聞いたとき、眼の前が真くらになった。

ところで高坂先生は、東京文理大から来られたが、われわれとはちがって、そのときすでに学者として絶頂に達していられた。やがて初代所長の小島祐馬先生が停年退官されたあと、所長となられた。わたしは、哲学上のこと、思想論上のことなど、手をとって教えてもらった。高野川べりのお宅には、度々お邪魔した。ご馳走にもなった。ご恩を忘れることはできぬ。高坂さんは、戦後、一時追放になられたが、その後、復帰、東京学芸大の学長をつとめられたが、倒れられた。回復後は、国立教育研究所長になられた。

その当時、文部省で用足した後、教育研に高坂さんを訪ねた。ところが「先生は胃腸病院に入院中」という。

「なんとという名の胃腸病院か」とたずねると、「胃腸病院」という名の胃腸病院だ」という答えがはねかえってきた。あててた。ともかく病院に先生を見舞ったところ、奥さまから癌だと告げられ、本人は知らないのだから、そのつもりでと注意されて、お会いした。その朝、ひげをそってあげたということで、きれいになっていられたが、瘡せ細まって、蚊のなくような声であった。奥さまの通訳で話した。嬉しさがかくしきれない様子であった。「いもを作ったね」。そんな話である。戦争中、構内を掘りおこしていもを作ったことを思い出されたのである。「これからまだ書かなくてはならぬものがあるからね」。これが最後の言葉であった。そしてこれが先生とのこの世のお別れであった。それから僅か一週間足らずで、この世を去られた。

研究所創立当時の専任所員は、こうして次から次へとあの世にいったしまった。もう残っているのは、わたしだけである。創立当時の意気込みは強いものであったし、また教えたり教えられたりするのに都合のよい専門構成になっていたということもあって、この五人は度々集まった。また酒も飲めば、家族どうしのつき合いもした。身体ぐるみ、家族ぐるみの総合研究であった。わたしはそういう中で育てられた。まことにありがたいことだったと思っている。

旧分館とわたくし

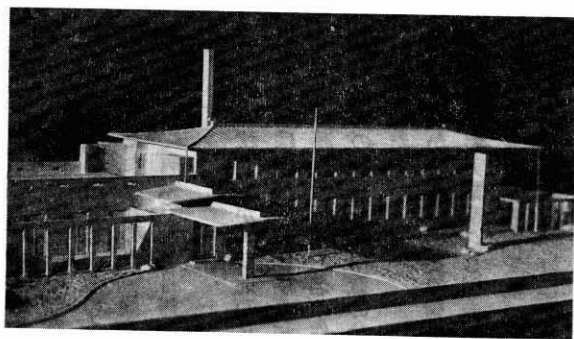
吉田 光邦

分館すなわち旧ドイツ文化研究所の建物は、寂しい運命をもった建物であった。日独交渉の文化センターとして設計されたものが、戦後はアメリカ軍のオフィスとなり、さらに人文科学研究所の分館となって、多くの改変を受けつづけたのである。創設当時の機能とはほとんど異質とっていい機能を強制されつつ生きていたあの建物の姿は、最後に住んだもののひとりであるわたしにとっても、もはや惨憺としかいいようのないものであった。この建物が京都に生れたときの評価をわたしは知らぬだがそれは武田五一設計の時計塔のある本部の建物のもつエネルギーな感覚と、たいへん対称的なものであった(人文研の北白川の建物も武田五一である)。武田五一の数多い作品は、いかにも当時の帝国大学のイメージである。それにくらべると日仏学館とならぶこの瀟洒な建物は、ひとときわ目をひくものであった。

これが村野藤吾氏の初期の作品であることを、わたし

は京都へ来てはじめて知った。村野作品としては昭和十年の十合が有名だが、この建物はその前年に完工している。十合のファサードにみる直線の美しさは今日でも印象的だが、それと同じようにやさしい曲線の屋根と、豪放な打ちっ放しのコンクリート列柱の対比、またほそくあしらわれた樋の直線などは記憶にのこるものである。それに竹と石を添えたのも、ようやく分離派を最後として海外直輸入のデザインが終りを告げ、形式も内容も、日本の建築が自立したことをしめすものであった。同時に以後の村野作品の要素の多くが芽をふいているのは注意さるべきであろう。

しかもそれらには大阪を中心に活動していた安井、長谷部、渡辺などといったデザイナーとは異なったものがある。その疑問はこのたびの村野氏訪問に



旧分館の模型

よってはじめに氷解した。氏には今和次郎につながる線があったのである。独自の現代考察を進めていた今氏と。

消えた分館はわたし個人にとっても、なつかしい青春の思い出の建物である。戦時中、灯火管制で暗くされたあのホールで、豊増昇氏がえんえんと、ベートーベンのピアノソナタの連続演奏会を開いていた。聞く人は少なかった。明日の日も知れぬあの時代に、ホールに鳴っていたワルドシュタインや、八番、十四番。それは沈鬱な時代に生きていたあの建物の歴史のひとつである。

人文科学研究所東方部の

漢籍と私

吉川 幸次郎

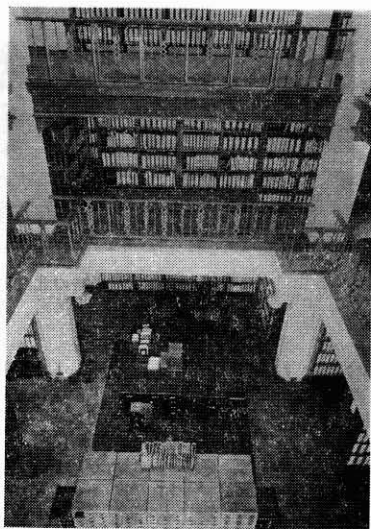
昭和四年、創立直後の東方文化学院京都研究所は、天津の蔵書家、陶湘氏、字は蘭泉から、明清の叢書数百種のコレクション、計二万七千九百三十九冊を、一括購入した。すべて精刻精印、且つ半ば以上は始めて日本に輸入されるものであった。陶氏は銀行家と聞くが、他の蔵書家のごとく宋元版のみを偏重せず、近代の書を愛したもの的一部分である。交渉の一切は、文部省留学生とし

て北京にいた倉石武四郎氏があたり、東亜考古学会の留学生水野清一氏が助けた。価は三万円。研究所の建築が四十万円で出来た時代であり、政府が出ししぶるのを、無理解なりと、老先生たちいきりたたれたのを、同じく北京への留学生であったけれども、病気で数ヶ月帰国中の私はきいた。

書物が到着したのは、その年の秋、私が再び北京に赴いてのちである。もっともの喜びは、狩野直喜所長にあり、北京の来薰閣書店主陳済川の派した工人二名の作る帙がよそおわれるにしたがい、背の題籤をお得意の翁同龢ばりで、みずからされたと聞いた。

以後二年北京にいた私は、どこかの本屋の奥座敷で、陶湘氏をよそながら見た。短軀、大実業家らしい赤ら顔、暗紫色の坎肩カサザエル児、鞠躬如とはべる本屋の主人を前にして膝の上にひろげた本を、我不喜歡這類的書、わしはこういう本はすかん、そうつぶやくのが聞えた。

昭和六年の春、留学を終えて帰ると、同じく研究所員となった倉石氏とともに図書係りを兼ねた。以後数年、私のしたことは二つ。第一、陶湘コレクションにない単行本の蒐集。珍本は敬遠し、清の考証学を中心とする実用書、ただしせいぜい精刻精印、欠葉は必ずしらべる、購入先は主として北京、ことに来薰閣、文奎堂。張之洞の「書目答問」を基準としたのは、宋明理学の書を乏し



旧本館の書庫

くする欠陥をもたらした。

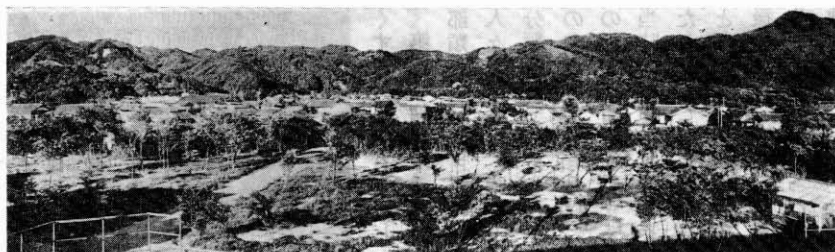
第二、陶湘本叢書の収める数万の書を含め、すべてを部類別にした目録の作成。故渡辺幸三君はじめ、関事の人々の尽瘁は、昭和十八年刊行の「東方文化研究所漢籍分類目録」に付した私の跋、私の全集十七巻にも収めるのに譲り、分類法は、倉石氏の発議により、天津図書館の目録が下敷きであること、この仕事のおかげで、私は当時の書庫の本のすべてに指紋を印するという幸福を得たこと、この目録が以後いくつかの図書館の目録の藍本となっているのを愉快に思うことを、書き添える。四日後の私は、四十五年ぶりの訪中に旅立ち、桂林をも訪れる。さっそく繰ったのは、史部地理類雑地志之属広西の項。昭和五十年三月二十日。

創立時代の建物

長 広 敏 雄

昭和四年四月に東方文化学院京都研究所（いまの人文研東方部の前身）が創設されたとき（私は形式上そのときから所員だった）、建物はまだなかった。私たちは文学部陳列館の一室にいた。研究所の敷地について、はじめは東山近衛通の南側（楽友会館の向い。旧京都一中址）が候補にあがったが、研究には閑静な場所がいいという老先生たちの主張で、北白川小倉町五〇番地一千坪に決定したのだ、ときいている。坪五円なり、だったという。そんなに安い土地なら、いまの倍のひろさにすればよかった、と私たちはよく話したものだ。昭和四年には小倉町は、一面の花と野菜との畠地で、東側は雑木と桜とがまじって林をつくっていた。北は一乗寺どころか山端のもつくりした緑の山、修学院の麓の小山さえ、よく見えた。いまのような住宅地になったのは研究所の創立以後である。

『東方文化』（研究所のことを俗にこういつていた）の



本館屋上よりみた当時の北白川 左下にテニスコート，東側は雑木林と遺跡

建築は、京都での名建築の一つといいたいだろう。この建築のたまかなアイディアは恩師浜田青陵先生が着想されたのである。先生は研究所の母体東方文化学院の理事七名の一人であり、美術と考古学の専門家として、建築委員をしておられたのだ。スペイン風の僧院の写真を見て、この着想が生まれたときいている。そして幸いなことに実際の建築設計は、京大大学院にいた東畑氏がうけもたれたことである。東畑氏は建築に重厚さとはのかな飾りとを調和させる名人だからである。だが当時、東畑氏はまだ

少壮建築家だったし、おそらく「東方文化」の建築は、彼の出世作だったろうとおもう。

昭和四、五年は不景気風の吹いた時代で、建築工費はとても安かったらしい。私は建設最中の「東方文化」によくいてみたが、床に張ってある木板だけでも、びっくりするほど良材だった。窓ガラスは可成り厚いのを用いている。窓といえば、当時の大学の研究室は窓が小さかった。研究所の窓はロマネスク風の半円形の部分だけでも、ずっと大きい。

最初の設計では屋根瓦は赤くする（ロマネスク建築にはよくみかける）ことになっていたが、これは儒教的な老先生たちの反対でオジャン。黒い瓦は、しかし、ふつうの瓦ではなく、別あつらいの本瓦である。いつか東畑氏に会ったときの話では、相当数の予備の瓦を創立時につくっておいたということだった。

東畑氏が残念がっていたことは、塔である。最初は三つ窓と二つ窓とを設け、塔の平面は正方形でなく短形にして、すらりと高く見せたいと考えたが、二階の構造上結局この原案を捨てざるをえなかった、と話していた。つまり、窓が四方いずれも三つ窓になり、鈍重な塔になってしまったのである。しかし有用・無用の議論からすれば、無用の塔だが、建築美としては、なくてはならない塔である。そういう建築美を「東方文化」は至るところ

ろで發揮している。

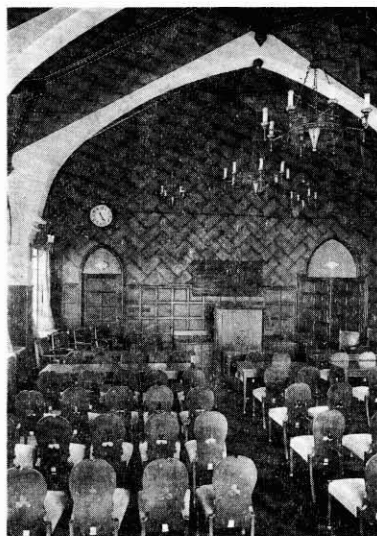
ステンド・グラスを注意してほしい。塔にもあるが、一階から二階にのぼる階段の大きな窓には、浜田先生の考案した日本古墳時代の文様を応用したステンド・グラスがある。いまの会議室の入口の上層リユネット（半円形部分）には動物の浮彫がある。これもロマネスク式発想である。一階ホールと階段との隔壁には日本では珍しい（当時として）有孔性大理石が使っている。また同じホールの裝飾陳列棚も同じ材質だ。

そのホールと階段には赤い絨緞をしいた。絨緞でおもい出したが、創立時から所員だった安部健夫君の提唱で、個人研究室には茶色の絨緞をしいてもらい、研究には休息が必要だということから、長いソファも入れてもらった。各研究室の扉に青銅製のノッカーをつけさせたのは、浜田先生であり、二種類のデザインは漢代の獣面環と帯鉤から採用された。

いまの人文研から見ると、創設時はまったく「夢の研究所」のごとき感がないでもない。こまかいことは兎に角として、大きく変ったことは、創設時の使用目的といまの転用ぶりである。二階からみよう。いま私の手元には『東方文化学院一覽・昭和八年八月』があるが、その付図に「東方文化」の平面図が載っている。いまの文献センター・閲覧室は本来、講堂であり、ちょうど僧院内の

チャペルのようなゴシック様式の構造である。昭和五年十一月九日の建築落成を記念して、この講堂で内藤湖南先生が講演された。新築ホヤホヤの書庫のペンキが乾ききっていないくて、内藤先生の和服の袖に白いものが付着したことを覚えている。

講堂の西北扉をあけると講師控室（いまは司書室）、また東の扉をあけると小控室になる。また東側の非常階段は、一般聴講者の出入口の目的でもあった。書庫は、当時としてもっとも新設計に属する。(1)中央は天井から採光して明るくする。(2)また中央は閲覧室風にテーブルと椅子を配置する。(3)書架と書架との中間の窓辺にテーブルと椅子をおく。(4)採光のため、鉄板の床にガラスを張



旧本館の講堂

る。(5)地下室よりリフトで書庫に荷をあげる。等々である。書庫に張ったガラス屋根は、比叡山頂からでも、キラキラ光るのがみえたものだ。

一階にうつる。いまの会議室はもと事務室であり、所長室と通じていて能率がよかった。そして、いまの事務室は所員の食堂である。天井の装飾、それに奥の配膳室、南側のヴェランダの設備、つまり、はなはだ非事務的な設営でもそれが分る。そして創立のころは、食堂に特別の椅子（もたれがずっと高く、底は簾が張ってあった）が設けられ、それは事務椅子には転用できないものだった。

研究室のならば回廊の中庭に面する部分には、本来（ロマネスク僧院らしく）ガラス扉の遮蔽はないはずだったが、これは美観が実用に負けて、いまのようになった。冬が寒いからだ。

研究室の回廊は二階建ての改造を考慮して施工してある。私はあがったことがないが、天井裏はずいぶん丈高いそうである。もしも太平洋戦争などがなければ、創立十年後ぐらいには改築できたのかも知れない。

地下の施工もいまはすっかり無用となった。もとは写真室、装幀室、調理室であった。だが、地下室は湿度が高くて不健康であった。これは設計ミスといわねばなるまい。全館の暖房装置は温水式だったが、これも回廊の

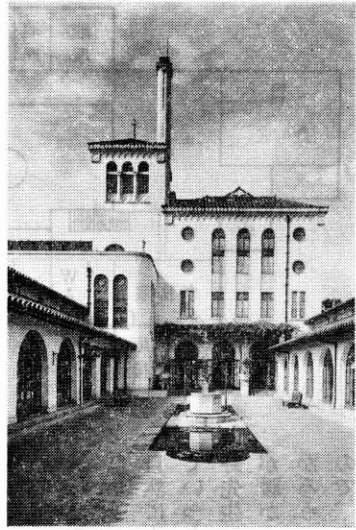
研究室へはぬるま湯しかこなくて、用をなさなかった。いくつか、そういうミスもあったが、どんな建築だって、あとから手直しをして改良するのが常識である。ただ「東方文化」にはそれを実行するのに必要な予算がゼロだったのだから、止むをえないことであった。

『橋と塔』の建物

森 鹿 三

今の北白川の本館が建ったのは、四十五年前の昭和五年の秋のことである。名前もいろいろ変わったが、最初は東方文化学院京都研究所といった。研究所の発足したのはその前年の四月であるが、当時はまだ建物をたてる場所さえ決まっていなかった。そこでとりあえず京大文学部陳列館の東南隅の一室を間借りして諸般の準備を開始したわけである。

所長の狩野直喜先生が部屋の南に窓を背にして座を占められ、われわれ所員八人は新調の机をもらってその前にならぶ。理事や評議員をはじめ来客が多く、なかなか活気を呈する。その間にも土地や建物の話が進められて



旧本館と中庭

いったことであろうが、われわれの耳にはいったところでは、第一の候補地は近衛通のもと一中址のようだったが、しだいに北白川の方が優勢になっていった。それでわれわれも下検分に行ったが、当時の様子は今とは大分ちがっていて、予定地のあたり一帯は雑木林であった。爪先き上りの旧街道の左手には白川の水を引いて精米の用に供する水車が点在していたが、それを三つばかり数えた処を北に折れると、今いう雑木林があったのである。

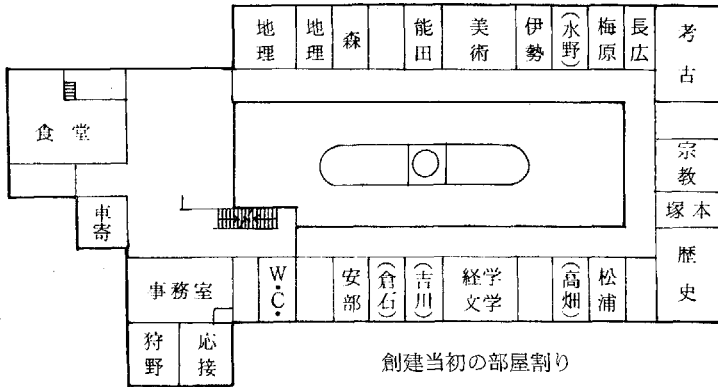
建物は武田五一先生の設計になるが、研究所の理事であった浜田耕作先生の構想がふんだんに取り入れられているようである。書庫を含むメインビルディングが天空に向かって高く延びる塔状を呈せるのに対し、その東に連なる研究室はすべて平屋で水面に横長く延びる感じ

である。先生がその数年前に岩波から出版された『橋と塔』というしゃれた本を思い出したのは私一人だけではない。もっともこの建物のモデルと思われる修道院があるとのことではあるが。さらに二階へ通ずる踊場のステンドグラスから部屋ノッカーに至るまで、世界各地の古代文明のデザインが駆使されているのも先生の着想にちがいない。

玄関をはいって右手が事務室、その南に所長室、それから東へ応接室に通ずる。それが人文科研の本館になると事務室が手せまということで、もとの食堂に引き移った。玄関をはいった左手がホール、その西がもとの食堂なのである。大へん勝手よくできていて、地下の調理室との間には料理運搬用のリフトがあり、さらにハッチを通じて食堂へ運ばれるという工合である。十年近くの間、毎日の昼食はここで中国風の便飯をとることができた。

料理用のリフトのほかに書物運搬用のリフトもあって、地下から書庫の各階へ運べるようになっていた。建物のできる年の夏、中国から陶湘氏の大量の蔵書が仮寓先へ届けられていたが、それを新書庫に移す時にこのリフトは大いに効力を発揮した。書庫の入口に向かいあって講堂の入口がある。その講堂も今では東洋学文献センターに間貸ししてしまっている。書庫の二階から東に張り出したベランダからの比叡山や如意が嶽の眺めはすばらし

い。殊に大文字の送り火を見る絶好の場所であるが、今では書物が充満していて、そんな風流の用をなさなくなっているのではなからうか。



創建当初の部屋割り

こんどは塔から橋へ。塔の東に中庭を囲んでコの字形にならんだ研究室を見てみよう。大型のが四、中型のが二、小型のが十八個。部屋の配分については特に協議したことはなかったが、自然に決まっていた。狩野先生は南側が暖かくてよからうというので、南側中

央の大型を経学文学研究室とされ、浜田先生は鬼門に当る東北角の大型をあえてカフェアルケオロギアとされた。小川琢治先生は西北の中型は少し小さいから、東隣の小型と併せて地理研究室としようやといわれ、建築中から設備や調度について工夫をこらしておられた。西は製図室で東は写真室というのが基本的な構想のようであった。もちろん地下に写真室が作られることになっていたが、先生は地理専用の写真室が必要と主張して、暗幕、洗い場があり電気、水道のはかにガスもこの部屋には通じていた。私はさらにその東の個室をもらうことになったが、十畳あまりの縦長の部屋で、ここに机、脇机、腰掛三脚、ソファ、衝立、ガラス戸のある書架が二個と戸なしが二個、ともに木製という調度であった。現在では効率のよいスチール書架が両壁面、天井まで設備されていて今昔の感にたえない。

もう一つ建物に関係して鍵のことを記しておこう。アメリカのカービンとかいう会社のもので、自分の部屋があくばかりでなく、玄関も書庫もこの一つの鍵で開くように作られている。もちろん、マスターキーではないから、この三か所以外は開かない。どなたの構想でこのようなキイが選ばれたのか知らないが、時間の拘束を受けずに仕事のできるといふ思いやりには頭がさがる。

改築について

河野健二

(前所長)

人文科学研究所の新しい建物が、いま完成をいそいでいるが、現在の時点でいえば市電の騒音をさけ、書庫の空気調節をはかるために、東側を壁で閉ざしたので、外観は何となく陰気である。完成後はもう少し明るい印象になることを望んでいるが、もしかすると内外の人々にあまり喜んでもらえないかも知れない。それを考えると新所屋建設の苦心談などを大げさに書くのは気がひける。簡単な思い出だけをしるしておこう。

旧館が手狭になって改築が要望されたのは十年來のことであった。敷地内に六室ほどの二階建ての研究室をつけ加えたり、図書を付属図書館に預けて急場をしのいだりしたもの、私が所長になった一九七〇年頃には、もはやどうにもならない状況になっていた。研究室の廊下まで書棚や書類棚がはみ出し、雨もりや停電の苦情が相いついだことはともかくとして、共同研究のための会議室が不足して、わが研究所の特色である共同研究の仕事が意のままにできなくなったのが最も深刻であった。

この時点以後の四年間は、まったく未経験な一人の研究者が

研究所内の意志統一を手始めに、大学の事務局とくに施設部、総長、文部省などの理解と協力をうるために、どれだけの手数を必要としたかの実験例である。この仕事が成功であったかどうかはまだ不明であるが、敷地の狭さと、役所の建築面積基準の低さの問題、建築についての市条例や日照権による規制、石油危機、狂乱物価、総需要抑制などの政治的・経済的変動と規制などが、ふつうでは考えられない困難を作り出し、その一つ一つを打開することは、経験のない私にとって重い荷物であった。文部省の最上階にあった施設関係の課のドアをおしながら一体いつになったら、こんな仕事から解放してもらえるのかと嘆息した記憶はなまましい。役所の世界というのは、学問研究とはちがって一休どこに問題があるのかということが判らないようになっていた。質問をして出てくる答は、必ずしも答えそのものではない。大学内でも同じだが、経理部と施設部とは同じ問題について異なった対応をするので、問題そのものが消えたりする。貴重な経験といえはその通りであるが、行政の複雑さや人間関係のむづかしさを痛感した。

しかし、結果としては、私の接したすべての人々が予想をこえて親身になって私たちの願いを容れ、実現のために努力して下さった。その数は百人をこえる。新しい建物にもし欠点があるとすれば、予算の制限や予期せぬ経済情勢にもとづくもののほかは、私の不注意と力不足によるものである。御容赦を願いたい。



建 物 物 語

旧分館設計者村野藤吾氏に聞く

聞き手 吉 田 光 邦
上 山 春 平

▼まえがき

私たちが「分館」として使ってきた東一条の建物は、もともと「ドイツ文化研究所」として、一九三四年（昭和九年）に建てられたものを、敗戦後にアメリカの進駐軍が接収してしばらく使ったあと、一九五二年（昭和二十七年）に人文が譲り受けて使うようになったのでした。このたび、この敷地に新館を建てるはこびになって、その建物は取りこわされることになったのですが、実は、そのことによって、私たちは一人のすぐれた建築家の初期の作風を代表する貴重な作品を心ならずも破壊する結果になってしまったのです。

あの建物が有名な建築家の作品だということとはかねてからきいていたのですが、その方がどのような作風の方であり、あの建物がどのような意義や価値をもつのかという点については、ほとんど何も知らず、また知ろうとしなかったのです。

まことにはずかしい話ですが、その建築家が村野藤吾という方であり、今日の建築界の主流をなす機能主義的な傾向にたいし

て、ロマン主義的ともいうべきムードをたたえた独自の境地をきりひらき、建築の世界ではきわめてユニークな存在として高い評価を得ておられる、ということを知ったのは、この特集号の編集に当たってからのことでした。

三月十一日の午後、私は吉田光邦さんと一緒に、大阪の阿倍野筋にある村野さんの事務所を訪れました。吉田さんに同行していただいたのは、日本の技術史ならびに芸術史にかんする広い視野に立って、適切な質問をしていただけではないかと考えたからです。吉田さんはこの期待に充分こたえて下さったばかりでなく、往復の電車のおかげで村野さんの作風や建築史上の位置について、懇切な解説を与えて下さいました。

村野さんは八十才ちかい御老齢ですが、みずみずしい感じのただよう、清らかな、銜のないお人柄で、流感が抜け切れぬとかで、御気分のすぐれぬところを押して、一時間あまりも私たちのために貴重なお時間をさいて下さいました。

お話のはしはしから、あの建物にたいす

る深い愛着のお気持と、その心ない使い過ぎにたいする遺憾のお気持を伺い知るにつけて、あの建物をたんなる研究活動のための施設としてのみとらえ、それにふさわしい用方をしなかったばかりでなくその破壊に加担する結果になってしまったことを居たたまれぬほどはずかしく思いました。

以下は、そのときのインタビューの一端をまとめてみたものです。なお、その時お借りした「ドイツ文化研究所」関係の写真アルバムから、数点をえらんでこの特集にのせさせていただきます。あわせて、あつく御礼申し上げたいと思います。

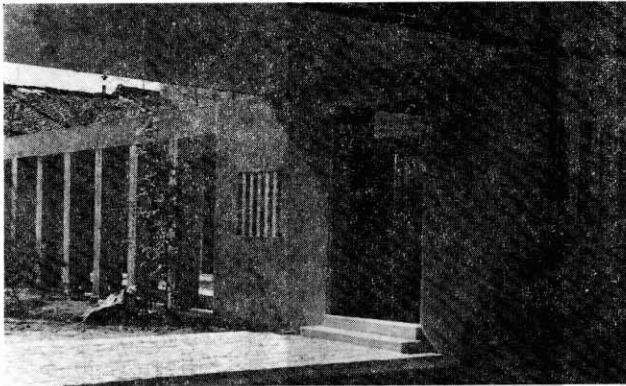
(文責 上山啓平)

▼分館のデザイン

——あの建物は村野さんのお若いころの作品とうかがっているのですが。

村野 そう、一九三四年だから、私が三〇年に独立して仕事をはじめてから四年目になります。独立したのが四十ですから、四十四ということになりますか。

——非常に初期のお仕事なんですね。
村野 そうです。私の仕事としては、あ



旧分館の玄関と列柱

れは記念すべき建物のように思っているし、人からもそういうように評せられているんです。あそこに、おそらく当時としては初めてのことでしょうが、コンクリートの打ち込みの列柱がありますね。コンクリートの肌をそのまま出して、そういうので日

本的な調子を出したいと思ったのです。そんなのが此のごろはやりますけども、当時ではなかったのです。ああいうところに、私としては、自分のやりたいことをやったなという感じがあるわけですね。

——あの列柱のあたりには篠竹が植えこんでありましたね。

村野 ええ、そうですね。何かしきりに日本的なものをさがそうという気持から出たんですかね。

——あの傾斜のゆるい軽やかな感じの銅板葺きの屋根なんかには、そういうお気持がはたらいていたわけでしょうか。

村野 ええ、あまりうまくないでしょうが……。とにかく、お隣りの日仏会館なんかといい対照でしょう。あちらの方が一足さきにできていたんですがね。

——玄関のあたりや列柱のあたりなどに、なかなかいい石がありましたか、あれは初めからのものですか。

村野 そうですね。貴船まで取りにいったのですよ。それから、楠がありましたでしょう。あれもそのとき植えたのです。

——玄関から入ってすぐのホールの天井

に、丸いくばみがあつて、そこに大きな木の彫刻がありましたね。

村野 あれは、こんど家を持って帰りました。この事務所の壁に飾っておこうかと思つています。あれは驚でしょう。ドイツのシンボルのつもりだったのです。そして、あの丸いくばみのところに赤い灯をともして、日の丸のかっこうにしたわけですから、日独友好のシンボルだったというわけですか。ホールの奥が小さな舞台風になっていましたが、あれは……。

村野 あのニッチェのとこね。あそこにつかうために、ドイツからモザイクを取りよせたんです。ドイツ大使が寄付したんですよ。ところが、荷物がついたときには、貼るお金がなくなつて、そのまま置いていても仕方がないというので、ドイツに送り返しました。

—— それでは、あのニッチェはモザイクになるように設計してあつたのですか。

村野 ええ、ガラスモザイクで飾るつもりだったので。

—— そうですか。それなら分かりますね。あのニッチェは疑問だったのです。きつと

すばらしいものになつたでしょうね。

村野 いいのが来ていたのに、惜しかったです。そのころ私が関係してた東京の森五商店（東京支店）の天井にドイツからとりよせたモザイクがあるのですが、これは日本に唯一一つのものでしてね。まだこれだけのものは入りませんよ。

—— あのホールの天井に大きな梁が露出



ホール天井の木彫

していましたでしょう。

村野 あれは音響的には悪かつたんじゃないでしょう。われわれの間には音響学というのはまだ発達していませんでしたからね。

—— くっきりと木目が出たのを貼っておられましたね。

村野 ええ、よくあいうことをやっ

んですよ。ちょっと焼いて、そこに色をつけましてね。

▼その住人たち

—— あの建物の二階は、初め一部屋だったそうすね。大きな図書室風の……。

村野 ええ、一つだったと思います。一つあつて、右側の方に応接間みたいなのがありましたよ。

—— あそこは風通しのいい住み易い部屋でした。

村野 私としては、会談室が気に入っていた。コンクリートにじかに色つけなんかしましてね、今ではよくやっていますが、あのころとしてはめずらしかった。腰かけなども良かつたし、ともかく会談室は良かつた。しかし京都大学に移つてからの取扱いはね。まあアメリカの人はわけがわからんから仕方ないにしても、京大の先生方の建物尊重の仕方というものはひどかつた。まあ一般に作品に対する、建物一般に対する認識はそんなものでしょうがね。あれに対する認識は、こんなこと言つて申し訳ないですが、先生方だから御理解あるだろう

と思っていたところが惨憺たるものでしたね。まあ手狭だったからでしょうが、もうちょっと取扱いを良くしてくればよかったなあと思いますね。

——芸術作品としては、みんな考えてなかったと思いますね。

村野 中に入る人が違ってきた。もとはね、例の京都大学の有名な先生で、背の低い、ゲーテ研究の……。

——威瀬無極先生。

村野 ああそうそう。あの方が中心。それから、日本生命の社長の奥さんのお姉さんをお嫁にされた西彦太郎というライプチヒ大学を出た方がおられた。それらの方が中心でしたな。そういう方が中心になって器具を集めた。装飾品みたいなものはドイツから取りよせたと思いますが、お金のほうはどうでしたか私ちょっと覚えません。お金のほうは日本生命からかなりでたんじやないですか。それから渠関係。これらがファンドの中心になったんじゃないですか。

▼村野氏の作品と作風

——あの建物は当時のお金でざっといく

らくらいの工費でできたんですか。

村野 えーっといくらだったか、はっきり覚えませんが、その当時としては安かったですよ。それでもお金がないから塀がつけれなかった。しかし塀がないとまわりがつきませんから、それで仕方なしに私のなけなしの金で、あの煉瓦塀をつくったんですよ。

——先生のところに仕事きたのはどういうことだったんですか。

村野 それは西彦太郎さんと私が非常に懇意だったもんですから、それでお前がやれということになったんだと思います。

——ああいう公共建築物としては先生の初めての仕事でしたか。

村野 そうですね、初めてでしょう。

——京都では第一作になりますか。

村野 そのころに都ホテルがあります。

——ああ、都ホテルの上の方の別館ですね。あれがその前のことになりますか。

村野 ええと、どちらが先だったかな、都ホテルのマネージャーをしていたのが西彦太郎さんで、そういう関係で私が……。

——それ以後、京都でおやりになった建

物は……。

村野 まあ都ホテルが一番大きいですけども。

——あれは戦後もやっておられますね。

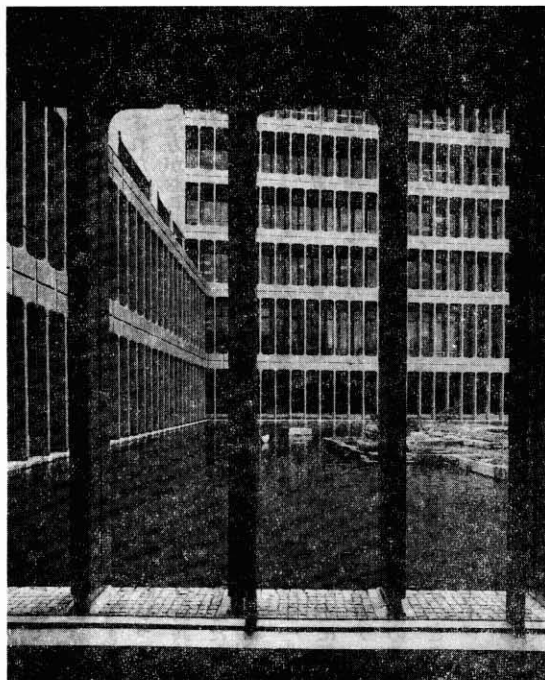
村野 ええ、むしろ戦後が主ですね。

——戦後の建築、特に今だったら非常に工業生産的な感じがありますけれども、ドイツ文化研究所を建てられたころはまだ手工業的な感じがあるわけですね。そしてまたそういうこともできたわけですね。

村野 ええ。私はその当時から今日まで一貫して大量生産的なものには反対の、対照的な立場でやってきました。商売になりませんけどね。

——最近お造りになったものでお気持ちにピッタリしたものは……。

村野 私はやりのことには関心がないもんですから、みな手のかかったようなものが多くてね。東京でいえば千代田生命の本店など。あまり合理主義的なものには関心がありません。やってやれぬことはないんですが、弟子を使っちゃってやれますし、口先だけでもいけますからね。頭さえあれば何も精神を浪費せんでもできるという、



千代田生命本店ビル（増田彰久氏撮影）

そういうものに私はあまり関心がないからやりません。

——調度品まで設計されるわけですか

村野 ええ、全部やりたいけどもなかなかやらしてもらえんだけの話で、気持としてはやらなきゃいかんということになるわけです。ただそういう部分的な仕事をする人がこんどはたくさん増えてきてますから

ね、そういう人を活用するということになる。そういう点で自然に変わっていくわけですよ。一貫して建築家の意志が徹底するということとはなかなかむづかしいものです。

——どうもいろいろとありがとうございました。

人文科学研究所蔵の銘文ある青銅器

林 巳奈夫

この研究所には僅かであるが中国の青銅器がある。銘文のあるものとしては現在ホールに陣列される戦国時代の鈎（横断面方形のつば）が筆頭にあげられよう。足に

四年の勾容（不明）のための器で重さは四尋十三、作った工人は某。右内飲の官の備品の第廿四号

という意味の銘文十五字がたがねで刻まれる。この器は無紋、一面に青緑のさびでおおわれ、頗る見えがしめない。銘文の文字も細く、よい光線の下で見なければ判読はむりである。所内の方でも恐らく目にとめた方は稀であろう。ところがこの銘文は戦国時代の「尋」という重量単位を推算する上に欠かせない重要な資料の一つなのである。銘文の文字の筆劃の曲線も戦国時代らしい緊張感にあふれている。この器の来歴については全く明らかでないが、私の最も大切に思う蔵品の一つである。

【『史林』五一巻二号林論文、参照】

建 物 物 語

旧本館設計者東畑謙三氏に聞く



聞き手 藤 枝 晃
田 中 淡
梅 原 郁

▼はじめに

東畑謙三先生は明治三十五年のお生まれだから今年満七十三歳、日本建築協会の会長をつとめられ、また東畑四兄弟の一人として、いまだ紹介の必要もなからう。

東方文化学院京都研究所の設計は、昭和四年、二十七歳の若さで先生がとりくまれた最初の大仕事であった。お話しでは、別に苦勞はありませんでした、と謙虚に語られるが、先生のこの建物への愛情と責任感、言葉のはしばしに感じられ、我々の胸を打つものが多い。

『人文』で建物特集号を出すにあたって、是非とも先生から詳しい話をうかがっておこうという提案がされ、三月初めの日曜の午後、御影のお宅に、藤枝晃、田中淡、梅原郁の三人がお邪魔した。藤枝氏は研究所在職三十八年、本年四月停年退官されたいわば研究所のヌシのような方、田中氏は建築専攻の所員である。

三時間を超える長い時間、先生は心よく我々の質問に応じ、若い世代の全く知らなかった珍らしい話、面白い話をさかせて

下さった。以下にその一部を梅原がまとめて対談形式で収録させて頂く。

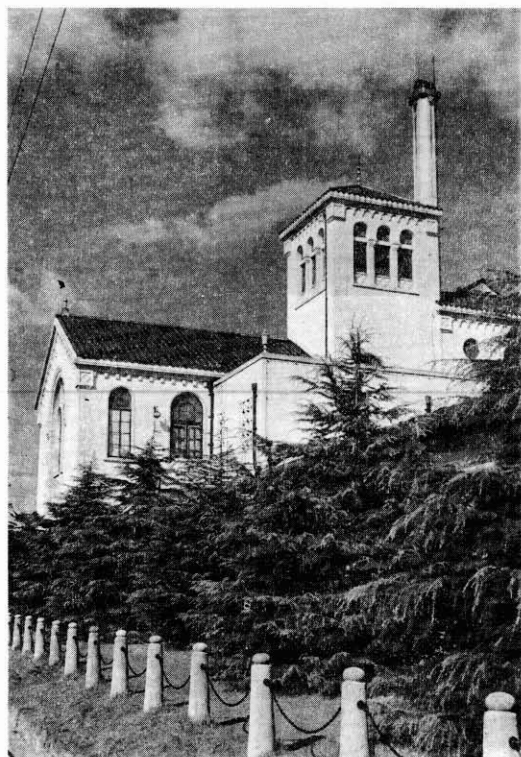
先生はつい先だって、建築関係の方々と新中国を訪問されるなど、第一線で、御活躍である。御多忙中『人文』のために貴重な時間をおさき下さった先生に、心から御礼申し上げる次第である。(文責梅原 郁)

▼設計のえにし

——このたび、東一条に新館が建てられ、北白川の旧本館は東洋学文献センターとその付属施設として、保存利用されることになりました。旧本館つまり旧東方文化学院京都研究所の建物は、京大の中でもひととき目立つものですが、この機会に、あの建物を実際に建てられた東畑先生から、いろいろ珍らしいお話をうかがっておきたいと思います。まず、先生がどうしてあの仕事をお引受けになったかというあたりからお願います。

東畑 私は昭和三年ごろ、工学部の大学院学生で、授業料を免除してもらう給費生でした。その期限が切れかかる頃、恩師の武田五一先生が、外務省が金を出し、十万

巻のシナの本を入れ、それを中心に十五・六人の研究生が勉強するシナ文化研究所を作る計画がある。東畑一つやってみないかと言われました。若い私は、当時ル・コルビュジェに心酔していた。余談ですが、ル・コルビュジェのものを日本に紹介したのは私が最初でしょう。だからシナ文化と聞いた途端、これは困ったと思った。中国の文化が優れていることは十分承知してい



東南からみた旧本館

るが、建物というと、反った屋根に、柱には竜か何かまきつけて、およそルビュジェとは縁遠いものですからね。

——それで暫らくお迷いになったのですか。

東畑 そうなんです。あの頃、先生の命令は絶対だし、断わるには腹を切る覚悟がある。段々聞いてみると、この計画は文学部の先生方が中心になられ、中でも浜田耕

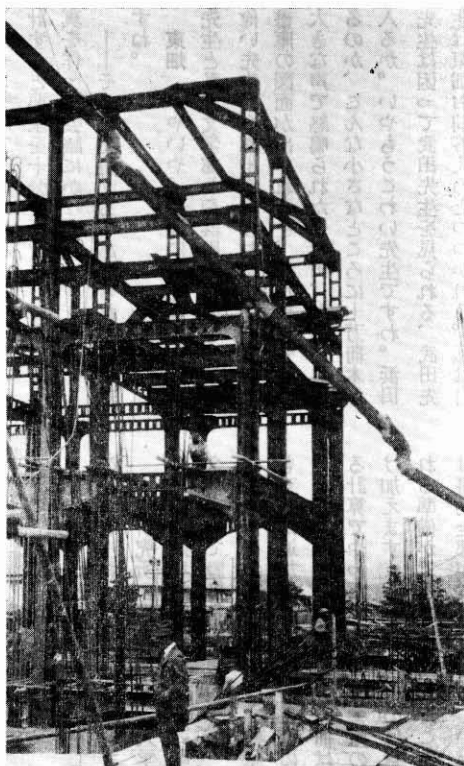
作先生と羽田亨先生が実際にやっておられることがわかった。浜田先生のことには『橋と塔』という本を読み少しは知っていた。そこで、文学部の図書館に出かけ、羽田先生の書かれた西域関係の本を読ましてもらったのです。

——まず相手の手の内を知ろうとされたのですね。

東畑 そうです。それで、読んでみると仲々面白い。これは変な屋根や、竜の彫物ばかりでもなさそう。そこで、武田先生に直接浜田先生にお会いしてはいけないかとお伺いをたてました。よからうということで、浜田先生に会って、私は率直に建築家としての自分の気持をお話したのです。

——反った屋根や竜はイヤということですか。

東畑 そうしたら浜田先生は、東畑、お前何を言うてるのや。わしもあれは嫌いや。東京の研究所ではああいうことをやるかも知れんが、関西ではそんなことはやらん。わしの好きなのはスペインやイタリアの僧院や。と言われて、もうちゃんとスケッチを書いておられるのです。それを渡されて



建築中の旧本館書庫

わしはこんなのがええ、東畑、お前やらんか。建築というものはシナの研究をするからシナのスタイルというそんなバカなことはない。建築は建築らしいものをやったら良い、と仰言いました。その一言で私は胸のつかえがあり、武田先生の所へ行って、先生やらして下さいということになりました。

——武田先生の作品としては、京大の時計台、建築の本館、それに東華菜館などが

ありますが、研究所の建物は、武田先生のデザインの系譜と違うのではないのでしょうか。

東畑 実は、武田先生は、外務省や文学部から依頼を受けられましたが、実際の仕事には殆んどタッチされなかったのです。偉い先生同志というのは話がつきにくいもので……。その点、青二才の私は、文学部の大先生とは至極気楽に話しが出来、思い切って苦情も言える。そこで、建築の

実際は私に任される恰好になりました。

——いよいよ設計にとりかかれるわけですが、浜田先生の僧院のスケッチは現在のものに近いのですか。

東畑 いや、それは時によって違うんで、ただ僧院の感じということを強調される。そうすると落着いた気分になり、研究者がゆっくり仕事が出来ると言われるのです。そこで先生の持ってこられるスケッチを何度も直してプランが出来上りました。ただ今でも私思うんですが、僧院の感じを近代建築で出すというところまでは突っばれなかった。それが心残りです。

▼書庫をめぐって

——研究所の塔の下は書庫になっていますがその設計について何か。

東畑 これには想い出があります。この仕事の始めから、十万巻十万冊の本という言葉が頭にこびりついている。この膨大な漢籍を収容するには独自の案を考えねばいけない。そこでアメリカにあった立体的な書庫をとり入れた。書架を段々に積上げ、床は重視せず何層も上ってゆく式ですね。

三十センチに二十冊入れるという計算で設計すると要求を十分満たせる。それで青写真を作って会議にかけた。

——そこで先生が男をあげられたわけですね。

東畑 いやいや、会議には建築から武田先生と私、文学部から浜田・羽田をはじめ偉い先生が全部出ておられます。いよいよ書庫の図面が出されると、小川琢治先生が大きな声で怒鳴られた。浜田、お前何しとるのか、こんな小さなところに十万冊本が入るか。いやもうこわい先生ですわ。浜田先生は困って武田先生を見られる、武田先生は東畑お前答えろとつつかれる。私は自信があるし、工学部の学生だから、文学部のこわい先生の前でも平気です。先生方はご自分の家の書架とこの書庫を一緒にしておられる。棚を積層して行くと本は物凄く入るもので、ために私がこで計算させていただと、計算尺をとり出した。工学部ですからそんなことは朝食前です。三十センチに二十冊入るとして棚の数と長さはこれだけと掛算をしてはじき出すと、九万九千九百九十七冊になった。

——文学部の先生がたは驚ろかれたでしょう。

東畑 浜田先生のその時の嬉しそうな顔、こいつやりおったなという顔をされてね。

——研究所の書庫は現在が大学の中で一番過密で飽和状態ですが、その頃はどれ位余裕をみて設計されましたか。

東畑 その時の話しでは、書庫も研究棟も五割は追加が入れられるようにとのことでした。だから書庫も十五万冊は入れられる計算でやった。それから書庫のことだけ加えますと、一番困ったのは貴重書を入れる準備ができていなかったことです。私は書物全部が貴重書と思っていた。なのに出来上ってからクレームが付き、あんなロッカー式の貴重書入れになったのです。

——書庫の採光はどうでしたか。

東畑 立体的な書庫にしますと、採光に苦心します。電灯をつけると危険だから床の上にガラスの窓をあげることにしました。これがまた会議でやられました。本棚をつみすぎると光がささぬではないか、いやガラスを床に張ります。ガラスノ、それは君割れてしょうがないぞ。という具合にね。

——文科の先生は大体科学に弱いから。

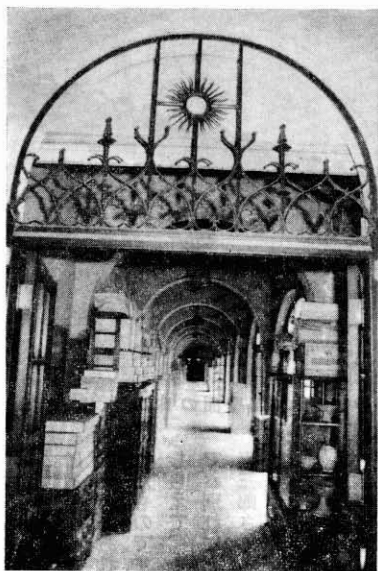
東畑 そうです。大先生がたはガラスというとペラペラの窓ガラスを思い浮べられる。十何センチのガラスといったら鉄より硬いんですよ。ただ出来上って行ってみると、下から上がスケてみえるんですな。ある先生から、婦人が上にいたらどうなると言われ、これはもう………弱りましたな。

▼建物内外のデザイン

——次に建物の内外についてお話しただくわけですが、全体が僧院の感じとして、具体的なデザイン・ソースがあったのでしょうか。

東畑 全然そんなものはないんです。部分的です。

いちばん困ったのはスペイン風のスタッコです。日本でいうと蔵に使う白壁です。あれは雨にあたっても痛まんからそれを使うことにした。ところが日本の蔵は下地が泥で自然に湿気の調節をやる。ところがこっちは下地がコンクリートでしょう。ヨーロッパのような湿気の少い所ではコンクリ



研究棟の廊下とゴシック風の装飾

ートや煉瓦といった吸湿性の少ないものでも良いが日本では困ります。研究棟は、屋根のひさしが出るからまだ良いが正面の部分は雨が直接当たる。そこでコンクリートの上に粘土を塗りつけ、その上にスタッコをかけるなど苦心しました。

——昭和五年ですね。別にそのころスパニッシュ・デザインがはやっていたわけではないんですね。たとえば京都南座は昭和四年ですが、あのころ復古調ということもなかったのでしょうか。

東畑 全然そういうことはないんです。武田先生はアメリカでスペイン人がたてる

スパニッシュ・ミッションが好きで、楽友会館もそれでやられたんです。それとスパニッシュの僧院が好きだという浜田先生の考えと一緒にたんじやないですか。

——武田先生ご自身の作品にはむしろデコラティブな要素は少いですね。

東畑 いえ、割とあります。四条の東華菜館もそうです。わたしはああいうのは嫌いですが、あれが武田先生のスパニッシュ・ミッションです。なにせわたしはコルビュジエの信奉者でしたからね。

——そうすると時代的には当時の風調とはちがったものだったわけですが、完成して、どんな反響がありましたか。

東畑 はずかしいこととで、青年として古い人と妥協したということとで、いまだに引っかかっています。

——正面玄関の前に
は間隔をあけて石が敷いてあります。

東畑 あちらの僧院

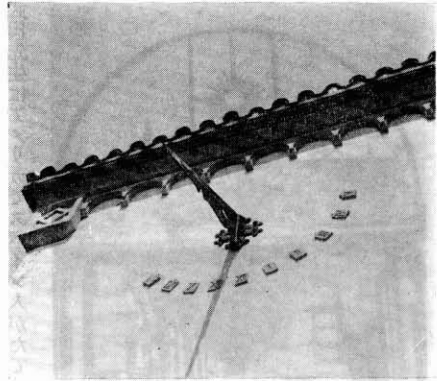
では、永い年月で石畳がすり減っていますね。浜田先生はあの感じが出来ぬかと言われる。はじめから減ったようになって無茶ですわ。それで目地を粗くしてそこへ草を生やしましょう。そしたら幾らかその感じになるということであまりました。

——最近ではまるで駐車場で、建てた人たちの意図などは全く忘れられているようです。それから正面の左側の壁に日時計がありますね。

東畑 浜田先生は面白いからつけただろうやと言われたが、他の先生に叱られました。日時計であれなかなかに敷いもんです。理屈から言えば北極星の方向へむいておれば陰は同じなんですが、緯度の関係でズレができ計算がややこしい。夜行って、北極星の方向みてその方向に図面を書き、後から壁にキズをつけて作って行った。でもキチンと合うのは一年に二度です。まああれは実験的で、あとで真似して作った人もいるが、うまくあわんもんです。

——車寄せから中へ、石の床に赤い絨緞がひいてありますね。

東畑 浜田先生は僧院やったら大理石の



日本館壁面の日時計

床が良いと仰言る。費用がかかってたまらんから、玄関だけは石にし、中は人造石にしました。石だけなら寒いから、上に絨緞をしいたのです。それと、玄関にはキャピタル（柱頭）がありますね。あれにはベースをつけたかった。浜田先生はベースのないものはないと言われる。それは先生違います。ギリシャではベースがつくが、スペイン・ミッシェンではベースがないのが沢山ある。写真持って来ましようか。成程な。とこうなるんです。そこは工学部学

生は気楽に偉い先生を説得できます。

——同じようなキャピタルが中庭の西側にありますね。

東畑 あれはまたごてごてしてると叱られたものです。デザインをして、模型をこしらえて、その通り彫らせました。あの下でお別れにと最初に研究員になられた松浦嘉三郎さんと記念撮影をしたのが、いま私の手元に残っている唯一の写真です。

▼研究室その他

——研究棟について何か。

東畑 あとのことを考えて、すべて現在の一倍半に余裕をみるというので、二階が積めるように作りました。いまの研究棟の天井は鉄筋コンクリートの床版になっています。その上にあんな恰好の屋根がおいであるんです。だから、屋根をとり、天井の床版の一部を廊下にし、残りを研究室に使用えば一階よりは小さくなるが、全体で一倍半分の部屋はできる勘定になっています。

——研究室の広さや位置などについては注文が多かったと思われませんか。

東畑 浜田先生や羽田先生がいろいろ言

われました。こまかいことは忘れましたが廊下をああいう形にしたため、東北と東南のすみに大研究室を作らざるを得なくなりました。ところが、東北は鬼門で行く人がない仕方がないから建築委員長の浜田先生が考古学研究室として自分で入られたんです。私は鬼門を信じないし、だいいち、その時新城新蔵先生が鬼門というけど、皆文献を読みちがえてると言っておられましたよ。

——外側はむろんですが、中に入って驚くのは、こまかな調度や装飾まで、最近では見られぬ神経を使った統一がはかられている点です。あれはすべて先生のお考えですか。

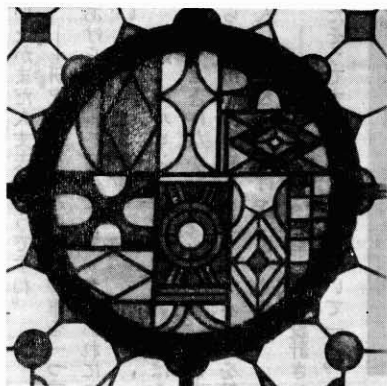
東畑 だいたいそうです。家具調度類は全部私が現寸の設計図を一枚一枚書いて作らせました。これが時間がかかった。それから、廊下の入口の上に、太陽やゴシック紋様のブロンズ装飾があるでしょう。武田先生はああいうゴシック・デザインについて、こまかく言われました。困った話ですが、ああいう飾り物はよく盗まれる。そこで玄関の帽子掛などは、全部下の鉄筋に溶接しました。

——階段の窓のステンドグラスは鉛がのびて波を打って来ています。

東畑 私はやはりゴシックのデザインを作ったのですが、浜田先生が九州の古墳の紋様を持ってこられた。それは良いと、あなりました。

——シャンデリヤや廊下、中庭の照明、井戸のデザインもこったものです。

東畑 あれも全部私のデザインです。あの照明具は喜ばれて、それ売ってくれという人が多い。大阪で同じものを作ってよう売れ、僕は面目を施したですわ。



階段踊り場のステンドグラス

——建物の外枠よりも、中の調度類の保存修理が問題で、事務室では、普通の官公庁なみに、毀れたら、新しい別の品ととり換えたがる。しかし、この建物の値打ちは建物全体にあるので、これだけ立派な落着いた調度を持つ研究所は世界中ないんです。

そこを我々は銘記すべきだと思っています。

東畑 いやいや、先程も申しましたように、私としてはあの建物は、妥協をしたという点でややひっかかるものがあって……

——しかし先生の最初のお仕事として、なみなみならぬご愛着をお持ちでしょう。

東畑 そうですな、丁度あの時私は結婚しましたしねえ。しかし、もうちょっとで五十年になる。昔のことですわ。

▼余譚あれこれ

——いくつか余談めいたことをお聞きしたいのですが、工事費はどれくらいでしたか。

東畑 当時、文学部の建物と同じ入札価格というのでやったところ、十九万八千円で大林組が引受けた。しかし、お金は三十五万あるんですな。だからああしょうこう

しようとかんだん良くなって行った。

——たとえばどんな風に。

東畑 ロビーにおく家の皮張りのソファとか。そうそう食堂にかけの飾りの鹿の首を六十円で買ったり、時計を買いに走ったり。

——三十五万円といわれてもピンと来ませんが、現在なら幾らくらいで同じものができますか。

東畑 そう。坪当り九十万から百万として、まず三億から五億というところかな。

——完成後も先生はたびたび様子を見に来れたと聞きました。

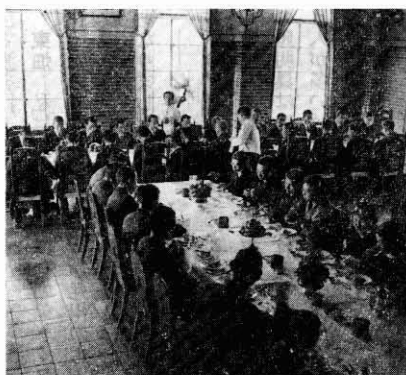
東畑 覚えているのは、昭和九年の大風水害ですな。僕はあの時、研究所がどうなったかととんで見に行った。あの屋根の瓦はちょっと六ヶ敷いめ方がしてある。とめるのは僕が自分でやった。鉄だと腐るから銅線でね。そしたらそのまま残っていて無事だった。嬉しかったですな。それで浜田先生へ報告の手紙を書いた。すると先生お留守で、回り回って京城から返事をいただいた。わしはちゃんと知ってる。東畑、お前の努力は多とする。とね。十年もする

とあの瓦や雨樋に事故が起るかと心配していたがまだ大丈夫のようです。

——研究員は入口と個室と書庫を一つであけられる鍵を持っていますが、あれについて。

東畑 コルピンの鍵です。浜田先生はそういうことになかなかウルサクて。それから良い鍵がありますと言ってコルピンを輸入している会社に行って買って来た。

——現在の事務室は食堂として設計されたそうですが、そのことについて一言。



食堂風景（旧本館事務室）

東畑 あそこで中華料理を食べると言われるんです。私はやめられる方が良いと言った。料理人は雇わねばならん。余り物が出て捨てんならん。食えることは良いが、その準備と後仕末が大変だとね。

——我々の聞くところでは、神戸からコックを連れて来て、昼の食事だけ作らせ、夜は京都の料理屋で働かす。人件費はコックを傭人という名目にし、材料費は所員の月給からひいたということですが。

東畑 そうですか、使ってもらいましたか。

——ええ。昭和六・七年から十二年まで続き、仲々御馳走だったそうで。

東畑 そうですか。わざわざ地下に調理室を作り、専用の小さなエレベーターも作ってね。調理の臭いがこもらないように下で作るんですわ。

——最後に、この仕事でいちばん想い出として残ることをお聞かせ下さいませんか。

東畑 私個人のことになりますが。武田先生の前では直立不動でしたが、浜田先生や羽田先生などには何でも言える。向うも言いやすかったか、軽口を叩きながら話さ

れる。狩野先生もそうです。皆こわがってピリピリしていたが、私は平気で、先生字がお上手やそうですな書いて下さいませんか。よっしゃ書いて。お宅へうかがうと、よう来た、中国の酒がある。お前飲めという調子でしょ。とても楽しく仕事が出来た。これら先生のおかげで、私はそれから中国の陶磁器や彫刻、そして絵画にとりつかれてしまいました。それでまた浜田先生に可愛がられて、お前ここへ来て中国の建築の研究をやれなどと言われたりしました。

——まだまだお話しはつきぬようですが今日はこのへんで、どうも有難うございました。

この特集号に使った写真の大部分は本、分館創建当初の撮影にかかる。旧本館関係のものは、その多くを梅原末治、羽館易氏、旧分館関係のものはすべて村野藤吾氏のアルバムから借用している。関係各位に厚く御礼申し上げます。また本号のカットは、本館と分館の装飾の一部分である。

（梅原）

人文の建物



自分の住み家を愛しなさい

田 中 淡

いったい人はあまりにも自分の身近にあるもの、生活の一部のようになつたものについては、それに下される客観的な高い評価など、ついぞ気づかずにいるものらしい。まして建築、はやい話が自分たちの住み家となると、決定的に無関心になるようだ。それはたしかに建築のもつ実用的機能に関わるころが大きい、必ずしもそれだけでない場合が多い。

人文の建物についても、まさにそういった軽視（あるいは無視）の傾向がつよいらしい。ところがわたしを含めて建築・都市の歴史と保存に関わりをもつ人間からみれば、北白川の本館と、東一条のすでに破壊された旧分館の建物は、いずれも京都の大正、昭和初期ごろの建築作品として出色のものであることはあきらかである。はやい話がこの当時の京大の建物と比べてみれば一目瞭然であろう。いずれももとは京大の所管とし

て発していない、人文の二つの建物は、明治末以降かなりよくのこっている構内の建物に比較するとき、建築的に相当ユニークなものであることが理解されるとおもふ。その意味でかりに同列にあげうるものとすれば、農学部林学教室、尊攘堂、楽友会館くらいであらうから。

現在、メタボリズム全盛の世から遠く隔たつて、巷間ではささやかながらも、近い過去の住き時代の遺産を保存し、活用してゆこうという気運が高まってきている。しかもそれは明治、大正の欧風文化ロマンティズムへの回顧としてではなく、また様式を学び保存するという純保存哲学をものりこえて、近代的な乱雑な生産への反省として、新しいものとその対立概念としての古いものを現実に対峙させようという積極的な意図を孕んで展開してゆこうとしているのである。

一方、より具体的な、純保存の立場からみても、この二つの建物は、充分すでに「文化財」としての価値を帯びていることは疑いない。「文化財」ということばはおそらく Cultural properties や biens culturels に対応する語として、戦後の新しい文化財保護法のときに造られたものとおもわれるが、それもすでにかなり一般的に浸透しているらしいことは、たとえば京都の〇〇地区を保存しよう、というような保存の推進側になったときは軽やかに発せられることばであるのに対し、こと自分の身辺に関連してつかわれる場合には、「骨董品」に近い消極的なイメージとして、きらわれることが多いことでもわかる。しかし人文研の二つの建物がすでに客観的には文化財の範疇に属すことはさげられない事実で、たとえば日本建築学会「大正

昭和初期の建築現存リスト」全国編・I、一九七四にもいちはやくマークされたし、一方、国指定の重要文化財で最も年代の新しいものは、現在、芦屋の旧山邑邸（F・L・ライト設計）の大正十四年で、一般的な方向としてすでにそこまでが対象になっているのである。

人文研の二つの建物のうち、北白川のいままでの本館は武田五一・東畑謙三の設計・昭和五年の建築で、東一条のすでに破壊された旧分館は村野藤吾の設計・昭和九年の建築であった。

大正から昭和初期の建築界は、明治の洋風建築全盛の試練を経過して、分離派の影響力のいちぢるしい時期であり、またしばしば近代機能主義の列に加えられるル・コルビュジェの活動が紹介されようとするときでもあり、同時に明治以来の洋風のデコラティブな建築は、変質・退潮化した折衷主義として存続しているという、はげしい変動の時代であった。現在のこっている代表的な建築としては、大正のころのものには比較佳作が少なく、昭和の初期に入ってからようやく目につくものがあらわれてくるというのが実情である。この時期の建築作品として、とくに京都ではいずれも独自の価値を有する二つの人文の建物について、この機会に、個別に気のついたことをメモしておくことにしたい。

旧東方文化学院京都研究所（北白川）

北白川の旧本館は、昭和五年一月三十一日に着工し、同年十月三十日に竣工したものである。設計は、記録によれば武田五

一氏をはじめ、

東畑謙三・荒

川義夫・藤本

秀隆の各氏が

担当したとい

うが、すでに

本号所載の会

見記事などに

も明らかなよ

うに、実質的

には東畑氏の

設計といっ

てもよいもので

あったとおも

われる。もと

より武田五一

の作品系譜をみれば、同志社女子大静和館（明44）、同セーム

ス館（大2）、京大文学部陳列館（大3）、同建築学教室本館

（大11）、京大本館Ⅱ時計台（大14）というように、氏の作風と

してはとくに京大講内の建物に代表される、冷厳な、帝国大学

デザインとでもいうべき、むしろ装飾的なファクターを抑えた

ものを想定してしまいがちであるが、師としての武田五一の志

向性は大いにスパニッシュ・ミッシェンを愛し、ゴシックの装

飾細部に熟達した人であったと、東畑氏自身が解説されている。

つまり、東華菜館（旧矢尾政）、藤井有隣館等のものの方に、



旧本館研究棟と中庭

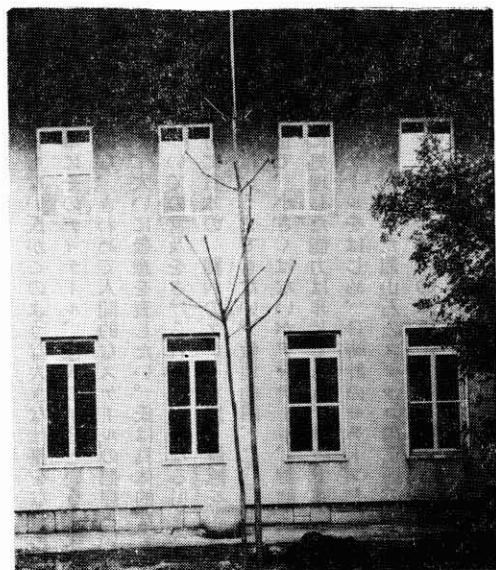
むしろそのような特徴があらわれているというのであり、この点はわたしとしてはやや意外であったが、それはともかく、北白川の本館が武田五一の作品系譜から逸脱したものであることも明らかであり、細部にいたるまでのデザイン・ワークのほとんどは東畑氏の手になる。なにゆえこの時期にこのようなスパン・ミッシュ・ミッシェン風の古典主義的な意匠がえらばれたのかについては、今回の会見記事にある浜田耕作氏との挿話によってその理由が明らかになった。その点について東畑氏自身が自戒されている古典主義的風潮、すなわち旧思想との妥協という当時の彼の苦悩、それ自体がむしろすでに歴史的価値をおびつつあるといったほうがよいような気がする。わたし個人としては、大学卒業まもない氏がこのような大きな仕事をなしたという事実を、単にそのディテール、様式の学習という意味だけでなく、全体的な、きわめて人間的なスケールの把握という面での成功として、大いに敬意を表したい。氏は具体的なデザイン・ソースについての言及をさけられたが、単なる引きつしではなく、充分に日本の、関西のスケール感、質感を考慮されたであろうことはいうまでもない。敷地約四、二〇〇㎡、一階約一、四〇〇㎡で、小さくはないがディテール、調度・庭園との調和を巧みに処理した能力は非凡である。僧院中庭をとりかこむ廻廊のスケールをはじめ、日時計のモチーフとしての採用、軒蛇腹の黄味がかった龍山石とスタッコの壁面、中庭の井戸と池、ステンドグラス等々のモチーフを、たのしく、さわやかにまとめている。奥田佳良二はこの建物の紹介記事の中で、竣工当時の印象を次のように簡潔にのべている。

「一言にして尽せば関西でなくては見られない濃かな気韻のある建物である。かかる感じは関東地方に見る鈍重な厚ぼったい建物と正反対である。かかる事が今口如何なる意味があるかは兎も角として要するにそれはリファインメントの問題である。」（『新建築』昭和六年第四号）

氏の意匠は、会見記事にもあるように、扉のノッカー環、帽子かけ等の家具調度や中庭の井戸枠等にいたるまできめ細かく及んでいる。なお家具の製作は高島屋装飾部、建築工事施工は大林組、庭園の設計は菊地秋雄氏による。また東南の、現在山田さんが住んでおられる居室もまぎれもなく当初の設計施工であることを付け加えておく。

旧ドイツ文化研究所（東一条）

一方、東一条のすでに破壊された旧分館は建築史的には別個の意味をもつものであった。この建物は巨匠・村野藤吾氏の、きわめて初期の系譜に属する。小規模ながらも神経の細やかにゆきとどいた瀟洒な建築であり、とくに村野氏のそのごの強烈な個性をもった数々の名作の展開に先行する、いわば初々しいデザインのファクターを随所にたたえた、佳作中の佳作であった。本来、今のような大所帯を収容するためでなく、ごく小規模な研究所として設計されたこの建物は、のちに人文科学研究所分館として、人をぎゅうぎゅうづめにおしこんだころから、すでに本来の価値を無視される運命にあったのであろう。しかし、そのありさまは、村野氏の偉大さを共通の誇りとして知る



旧分館の壁面と窓

人々にとっては、きわめていたましいことで、この建物はことあるごとに「現在は荒れはて当時の面影さえ残されていないのが残念である」（『村野藤吾作品集』一九六五）、「内部はすっかり改造され、全く当初の面影をのこしていない」（『現代日本建築家全集2・村野藤吾』一九七二）という「解説」が付されては紹介されてきたのである。

この建物は屋根の勾配が極端に平緩で、軒の出が深く、落着いた壁面窓枠のとり扱い、といった対比的なエレベーションのほかに、日本で最初のコンクリート打放しの列柱、キャンティ・リバーの玄関車寄せ、竹、自然石をあしらった庭園細部の処

理などにいずれも卓越した処理をみせていた。これらはいずれもそのこの村野氏の作品系譜における数々のユニークなモチーフ、ロマンティズムをたたえた作風の、初心な萌芽として、あるいは記念碑として、建築史的に大いに称えるべきものであった。（わたしが入所したときはすでに撤去が決まり破壊工事がはじまっていたので、内部はついにみられなかったのが残念であるが、各種の資料がのこされているのはせめてもの救いである。全三冊の作品集、竣工写真、『国際建築』昭和十年第三号記事など）。

創立時の写真を見ると、玄関脇にハーケンクロイツと目の丸が仲良くひるがえっているが、これに象徴されるような旧ドイツ文化研究所の成立事情にまつわるいまわしい歴史が、この建物を破壊することに少しも躊躇を与えなかったのだとしたら、ずいぶん軽率であったといわれても仕方ないだろう。せめて原設計者村野氏に旧建物との調和を考えた増築、あるいは改築という方向で設計依頼をすべきだったとおもうが、時すでにおそく、いまやそこには前身建物とは全く意匠的脈絡のとどえた、しかし一定程度機能的な新館が、のっそりと出現した。

これはいつてみれば一つの事件である。ただ、この選択に、当時の研究活動、内容の方向性が象徴されていたなどと、あとになって書かれることのないよう、住人のみなさんに期待することになろう。

人

文

第二号

昭和五十年五月一日

京都大学人文科学研究所 発行

明文舎印刷

非売品